

近代日本版画家名覧 (1900—1945)

〈凡 例〉

- 1、作家の選択は、凡そ1900（明治33）年から1945（昭和20）年までに版画制作の記録が残る作家（アマチュアを含めて）を採録した。但し児童版画は含まない。
- 2、作家名については、典拠文献や参考文献を参照し、それ以外は一般的と思われる読みを採用した。
- 3、年記は西暦を基本として、生没年については（ ）内に元号を表記した。
- 4、作品名は《 》、書籍・雑誌・作品集などは『 』内に表記した。〔 〕内は執筆補記を示す。
- 5、版種について、特に記載の無い作品は木版画とする。
- 6、類出する参考文献については以下のように表記する。
 - ・加治幸子編著『創作版画誌の系譜』（中央公論美術出版 2008年）→『創作版画誌の系譜』
 - ・『エッチング』（日本エッチング研究所発行／臨川書店復刻版 1991年）→『エッチング』
- 7、執筆者

岩切信一郎	（元新渡戸文化短期大学教授）	植野比佐見	（和歌山県立近代美術館学芸員）
加治幸子	（元東京都美術館図書室司書）	河野 実	（鹿沼市立川上澄生美術館館長）
滝沢恭司	（町田市立国際版画美術館学芸員）	西山純子	（千葉市美術館学芸員）
早川未央	（鹿沼市立川上澄生美術館学芸員）	三木哲夫	（兵庫陶芸美術館館長）
森 登	（学藝書院）	樋口良一	（版画堂）

戦前に版画を制作した作家たち (18)

【は】

萩原吉二 (はぎはら・きちじ) 1914～1957

1914 (大正3) 年3月12日青森市大字寺町に生まれる。まもなく盛岡市に移住。1928年盛岡尋常小学校を卒業。表具師としての仕事のかたわら独学で絵を始め、1932年杜陵日本画会第2回展に日本画を、素顔社第8回展に水彩画を出品。1934年から同じく盛岡の美術団体である「七光社」に参加、1936年の第28回展に木版画《晩秋》を出品、目録の表紙を版画で制作。版画を始めたのはこの頃とされる。1937年の第29回展にも版画3点を出品、目録表紙に版画を寄せた。同年中央への出品を始め、日本版画協会第6回展に木版画《樹ノ皮ヨムク》が初入選 (これ以降第10回展を除き第13回展まで連続入選)。以後も盛岡で制作を続けたが、東京への出品にあたっては下澤木鉢郎が作品を運び、畦地梅太郎が額装や搬入を引き受けたという。とりわけ畦地は、面識すらなかった萩原への温かな支援を長く続けた。1938年には白日会第15回展に《年中行事の中「裸詣り」》、造型版画協会第2回展に《サボテンと小鳥》、新興美術家協会展に《大工さん達》が入選。さらに1943年の国画会第18回展で《雪 (山村風俗)》が初入選、翌年の第19回展でも《馬市所見》で入選。1944年からは日本版画協会会員となっている。ざっくりとした刀遣いで盛岡の風物を中心に刻み、戦後も制作を続けて国画会と日本版画協会を中心に活躍、《仏頭》(1947) や1948年の国画会第22回展で優秀作品となった《体操》などの代表作は戦後に生まれているが、1951年に肺病のため床につく。翌年畦地の尽力により盛岡で「愛の版画展」が開催され、恩地孝四郎や棟方志功らの作品が展示即売されて治療費にあてられた。闘病しながら制作を続け、1950年代後半には抽象表現への傾きも見せ新展開を期待させたが、1957 (昭和32) 年4月2日入院していた盛岡赤十字病院で服毒自殺をとげた。【文献】『日本版画協会会報』36 (1944.1) / 『特集 萩原吉二』『北流』7 (1974.7) / 『岩手の近代絵画展 岩手近代美術の成立と展開 ～1950年』図録 (萬鉄五郎記念館 1989) / 『第43回企画展 萩原吉二と創作版画展 岩手の創作版画とその時代』図録 (岩手県立博物館 1996) / 『和南城愛理「畦地梅太郎と三人の画家—野中重吉・小林朝治・萩原吉二」』『町田市立国際版画美術館紀要』6 (2002.3) (西山)

萩原恭次郎 (はぎわら・きょうじろう) 1899～1938

1899 (明治32) 年5月23日群馬県勢多郡南橋村大字日輪寺 (現・前橋市日輪寺町) に生まれる。本姓は金井、萩原は生家の姓。1918年前橋中学校を卒業。在学中に校友会雑誌『坂東太郎』、短歌を中心とした地元の文芸誌『キツネノス』や『日向の草』『文章世界』『中学世界』『文章倶楽部』『青年文壇』『上毛新聞』などに詩や短文を投稿し文学に傾倒した。1918年には友人らと『新生』を創刊。1919年川路柳虹主宰『現代詩歌』に短歌を発表する。また前橋ハリストス正教会に通い、人道的、社会主義的事象に関心を持ち始めた。1920年詩話会に年刊アンソロジー『日本詩集』が掲載され、柳虹推薦で詩話会会員となる。また平戸廉吉を知り前衛詩運動に関心を寄せた。1921年井上康文主宰『新詩人』創刊に同人として参加、『現代詩

歌』やその後継誌『炬火』に詩を発表する。『種蒔く人』同人らと知り合い、抒情から社会派風へと詩風を変える。1922年『種蒔く人』に詩を寄稿、またクロボトキンの著作に親しむ。上京、壺井繁治の来訪を受けて新詩誌『赤と黒』発行を計画する。1923年1月『赤と黒』を創刊、同年中に通巻4号まで発行し、翌年号外1冊を発行して終刊した。1924年『ダムダム』創刊に参加する (1号のみ発行)。1925年村山知義らによるマヴォの機関誌『マヴォ』が6月に復刊し (第5号)、村山、岡田龍夫らとともに後期『マヴォ』の編集・発行人の一人となる (7号で終刊)。5号に詩論のほか題名不詳の挿絵を図版掲載、6号 (7月) にエッセイのほか、フォトモンタージュ作品《ジャズ》を図版掲載、7号 (8月) にフォトモンタージュ作品《女・建築・飛行機》を図版掲載する。10月、装丁と紙面構成を岡田龍夫が担当し、処女詩集『死刑宣告』を長隆舎書店より上梓。本文掲載の詩「恐怖に変色せし魂」のページに自作のリノカットを掲載した。この頃から新興芸術の総合性を主張し、「藤村行男」の名で創作舞踊を発表するようになる。1926年帰郷し、群馬県下の詩人たちを糾合して「上毛詩人会」を結成、また県下のさまざまな芸術家グループを糾合して「上毛総合芸術協会」を結成して活動する。5月にアナーキズム詩誌『太平洋詩人』が創刊され参加、6月に上京する。10月詩誌『銅鑼』の同人となる。1927年アナーキズム詩誌『文芸解放』創刊に際し同人となる。同思想雑誌『バリケード』創刊に際し編集同人となる。1928年小野十三郎・土方定一らとアナーキズム文芸誌『黒旗は進む』を創刊する。『文章倶楽部』のほか、『自由聯合新聞』『悪い仲間』とその後継誌『文芸ビルデング』などのアナーキズム系雑誌に作品を発表する。1929年一家で帰郷、養家の雑貨屋を営みつつも中央と連絡を取りつつ詩人として活動する。『黒色戦線』『学校』『第二』などに作品を発表した。1931年草野心平・小野十三郎との共訳で『アメリカのプロレタリア詩集』を弾道社から出版する。群馬県下の詩人50余名を結集して雑誌『全線』を創刊する。また10月に第二詩集『断片』を溪文社から上梓する。1932年個人雑誌『クロボトキン』を中心にした芸術の研究を創刊する。1933年農民自治に関心を深める。また強まる警察の取り締まりの目を意識しつつ中学校同窓や新聞社員、詩人らの協力により前橋を拠点に活動・生活する。1934年前橋の書店「煥乎堂」に入社、社員として勤務しながら中央詩壇と連絡しつつ詩人として活動した。1935年岡本潤らと『コスモス』を創刊 (1号で終わる)。1938 (昭和13) 年11月22日前橋で逝去。【文献】『萩原恭次郎全詩集』(思潮社 1968) / 『萩原恭次郎全集』1～3 (静地社 1980・1982) / 『生誕百年記念 萩原恭次郎とその時代展図録』(群馬県立土屋文明記念文学館 1999) (滝沢)

萩原群馬 (はぎわら・ぐんま)

西田武雄が主宰する日本エッチング研究所の機関誌『エッチング』第60号 (1937.10) に銅版画 (題名不詳) が掲載された。当時、萩原は群馬県新町小学校の教師をしていた。西田はエッチング普及のため、毎年夏休みを通しての小・中学校を回り、教師や生徒のための版画講習会を行なっていて、1937年9月25・26日の両日は群馬県藤岡中学校 (現・高等学校) でエッチング講習会 (講師：西田武雄) を開催。参加者名簿には萩原の名前は掲載されていないものの、紹介の写真には名簿の人数より多くの人が写っているところから、萩原も講習会に参加し、

その時の作品が誌上に掲載されたものと考えられる。その後、1943年と1948年9月から1958年3月までの期間、群馬県立沼田高等女学校（現・沼田女子高等学校）の図画教師として勤務した。以後の消息は不明。【文献】秋谷泰一「受講の記」『エッチング』60（1937.10）／金子一夫編『大正・昭和戦前期の中等学校図画教員と出身美術学校の総覧的研究報告書 第1部 直轄学校～三重県』（金子一夫 2016）（加治）

萩原豊彦（はぎわら・とよひこ）

愛知県岡崎で発行された版画と文芸の同人誌『志じ満』（しじま社）の創刊号（1926.11）に《或る風景》を發表。『志じ満』はこの号のみ確認。【文献】『創作版画誌の系譜』（加治）

白鳳軒盛勝（はくほうけん・もりかつ）

日蓮上人六百五十遠忌記念出版会から刊行された木版画集『日蓮上人全影』（1931 全26図）に木版画を制作。【文献】『京都古書籍・古書画資料目録 第8号』（2007.6）（樋口）

碓 伊之助（はざま・いのすけ） 1895～1977

1895（明治28）年11月14日東京市本所区向島請地町に生まれる。号は「三彩亭」。油彩画・水彩画・版画・陶芸を能くした。1911年慶應義塾普通部を中退し、日本水彩画研究所に学ぶ。1912年第1回ヒュウザン会展に水彩画《雨》など3点を出品し、画壇に登場。翌年の第2回フェウザン会展にも出品。1914年の第1回二科展に油彩画《女の習作》を出品し、二科賞を受賞。その後も第2・3・5～8回展（1915・1916・1918～1921）に出品。第5回展（1918）でも再び二科賞を受賞。1919年には会友に推挙された。1921年渡仏。パリのアカデミー・グラン・シヨールミエールに学び、1929年まで滞在。滞仏中の1926年に春陽会会員に推挙され、第5回展（1927）から第10回展（1932）まで連続して出品。1933年春陽会を退会。同年二科会会員に推挙され、第20回展に出品後、1935年まで再渡仏。滞在中、偶然にアンリ・マティスと出会い師事する。帰国後も第22・23回二科展（1935・1936）に出品したが、1936年に退会し、「一水会」の結成に参画。戦前は1943年の第7回展まで展覧会を開催した。一方で、官展にも出品するようになり、1940年の紀元2600年奉祝美術展、1942年の第5回新文展（審査員）、1943年の第6回新文展（展覧会委員）にも出品。また、1941年に文化学院美術部長、1944年には東京美術学校の油画科の助教授になり、後進を指導した。

版画は最初のフランス留学中の1927年頃か、ロンドンを拠点に活躍していた漆原木虫（由次郎）から伝統的な木版画技法を学んだことに始まる。1928年の第8回日本創作版画協会展に《マントン》、第6回春陽会展に《夜の祭》《巴里の一隅》、翌年の第9回日本創作版画協会展に《風景》《人物》《海景》を出品。帰国（1929）後の1930年に日本創作版画協会の会員に推挙された。その後、1931年の「日本版画協会」の設立に参加。常務委員（幹事）に選ばれ、第1回展に《黒衣》を出品。また、同年の第9回春陽会展にデッサン4点と共に《ヴァンサンヌ公園》《金鳳花》《支那壺の花》《田舎娘》を出品したほか、新興版画会第1回展の審査員も務め、『碓伊之助滞欧版画集』（12点組 毎月8円 日本版画社 未見）の会員を募集している。翌年の第10回春陽会展（1932）に《アヴィニオン街道》《横[た]

はれる少女》を出品。この1932年頃には石版画も始め、日本版画協会がフランス展の準備資金の一部に充てるために計画した「自画石版頒布会」に《そば屋》（第3回頒布作品 1933）を提供した。1933年の第3回日本版画協会展に木版画《金鳳花》《ヴァンサンヌ公園》《田舎娘》《アヴィニオン街道》《支那壺の花》《横[た]はれる少女》《黒衣の女》《蛙》（新作）と石版《そばや》（新作）を出品。また、同協会のパリ展準備のために旭正秀と共に協会派遣委員となり、渡仏。実務は旭と在仏の長谷川潔が担当したようであるが、1934年の「日本現代版画とその源流展」（2.6～4.8 パリ・装飾美術館）に木版画《ヴァンサンヌ公園》《アヴィニオン街道》《支那壺の花》《蛙》《マントン》石版画《そば屋》版画本『絵入みよ子』（佐藤春夫 青果堂 1933）など12点を出品し、開会式にも出席した。この滞欧中に石版画を制作。帰国した1935年の第22回二科展に滞欧作の油彩画《室より》など10点とともに石版画《伊太利の労働者》《堤防》《大きなパルミエ》《尼寺》《臺所》《朝顔》《ニース海岸通り》《南佛の村》の8点を特別陳列。『みづゑ』第368号（10月号）には出品作8点の図版が掲載された。また、出品作に《ニース海水浴場》《白い帽子》を加え、『滞仏石版画聚』（別題「滞欧石版画聚」10点組 45部限定 定価150円 版画荘 未見）として頒布されている。1936年の第11回オリピック芸術競技展（ベルリン）に石版画《櫓》を出品。1939年には「碓伊之助滞欧石版画頒布会」（旧作の8点組 40部限定 120円 広告）と『自刻自摺碓伊之助版画集』（第2次 12点組 毎月12円 100部限定 碓伊之助版画刊行会 広告）の会員を募集。なお、日本版画協会はこの年に自然退会の扱いとなっている。その後、1941年の第2回日本エッチング展に銅版画《風景》3点を出品した。

1945年3月の東京大空襲で画室を焼失。翌1946年から活動を再開し、同年の第1・2回日展に出品。一水会の再開にも努め、第8回展を開催し、以後も出品。また、「日本美術会」の結成に参加、その後委員長を務めた。1950年には渡仏のため東京藝術大学（1949改称）の助教授を辞任。読売新聞社が主催したマチス展（1951 東京国立博物館）、ピカソ展（1951 日本橋・高島屋）、ブラック展（1952 東京国立博物館）などを開催するための折衝に当たり、翌1951年帰国。帰国後は次第に九谷の色絵磁器に魅せられ、石川県小松に通って作陶を始め、1954年の第16回一水会展は色絵磁器のみを出品した。また、1953年の第9回日展（審査員）に木版画《潮来》、1955年の第11回展（審査員）に木版画《あやめ》を出品した後、1957年に日展を脱退。1958年には木下義謙・酒井田柿右衛門らと「一水会陶芸部」を新設し、1962年には加賀市吸坂に築窯。色絵磁器の作陶に励み、1976年の第38回展まで出品した。美術に関する著述も多く、『みづゑ』『アトリエ』『美術手帖』『藝術新潮』などに論文・作品評・エッセイなどを発表。主な著書に『マチス』（アルス美術文庫 1946）『パリの窓』（読売新聞社 1952）、訳書に『ゴッホの手紙 上・中・下』（岩波文庫 1955・1961・1970）などがある。1977（昭和52）年8月16日石川県加賀市吸坂で逝去。同年の第39回一水会展に遺作の油彩画《室内》（1928）《黄八丈のI令嬢》（1946）《Monsieur BONATI》（1947）が展示された。また、1994年には「碓伊之助美術館」（加賀市）が開館した。【文献】『碓伊之助展』図録（和歌山県立近代美術館 1974）／『碓伊之助作品集』（溪水社 1977）／『日本美術年鑑』昭和53年版（東京国立文化財研究所 1980）／田中稜『一水会五十年史』（中央公

論美術出版 1988) / 『春陽会七〇年史』(社団法人春陽会 1994) / 『大正期美術展覧会出品目録』(東京文化財研究所 2002) / 『昭和期美術展覧会出品目録 戦前篇』(東京文化財研究所 2006)(三木)

橋浦泰雄 (はしうら・やすお) 1888 ~ 1979

1888(明治21)年11月30日鳥取県岩井郡大岩村字岩本に生まれる。1904年『平民新聞』を読む。1908年鳥取歩兵第四十連隊へ入隊し、2年間の兵役に就く。1910年大逆事件を批判した弟時雄が検挙される。1911年同人誌『回覧』に誘われ「白日社」に加わる。1912年白日社を「水脈文芸会」と改名し『水脈(みを)』を創刊。この年上京し、恩赦で出獄した時雄を迎えた。1914年結婚、阪田姓となる。1916年有島武郎を訪問し交流を始める。またこの頃、出版社叢文閣を興す足助素一、小説家となる藤森成吉を知る。1919年望月桂らが結成した「黒耀会」に参加、第2回展(1920)に《火葬場の烟》を、民衆芸術展覧会(1921)に洋画数点を出品した。一方1919年に叢文閣で編集業務に携わる。1920年橋浦姓に戻す(前年に妻が死去)。この年創刊された『国粹』の12月号(1巻3号)から数号に亘って木版画を掲載する。1921年の第2回と1922年の第3回のメーデーで検挙された。この年矢来倶楽部で初めての個展を開催。1925年柳田国男を訪ね、以後指導を仰ぐ。一方日本プロレタリア文芸連盟創立にともない美術部長となる。1926年日本プロレタリア芸術連盟中央委員長となる。1928年柳田国男らと長崎県五島を調査する。全日本無産者芸術連盟結成にともない中央委員長となる。第1回プロレタリア美術大展覧会に出品、以後第5回展まで日本画やポスターを出品する。1929年日本プロレタリア美術家同盟結成に参加、中央委員となる。1930年柳田の『明治大正史世相篇』の執筆を補助する。1931年日本プロレタリア文化連盟の創立に参加する。1934年日本プロレタリア芸術運動が壊滅状態となり、以後終戦までは柳田の下での民俗学研究が活動の中心となる。この年久保清との共著『五島民俗図誌』(一誠社)を上梓。1938年『民間伝承』の編集長となる。一方、版画集『むさしの風景』其ノ一(朴の会)に木版画《道》を寄せる。終戦後の1945年10月に日本共産党入党。戦後は生活協同組合の結成に着手し、1946年に東京都生協連合会初代理事長となるなど社会運動家として活動しつつ民俗学者として活躍し、『まつりと行事』(毎日新聞社 1949)『民俗採訪』(六人社 1950)『月ごとの祭り』(岩崎書店 1955)『日本の家族』(日本評論新 1955)など多数の本を著した。1979(昭和54)年11月21日東京で逝去。【文献】鶴見太郎『橋浦泰雄伝—柳田学の大いなる伴奏者』(晶文社 2000)(滝沢)

橋口五葉 (はしぐち・ごよう) 1881 ~ 1921

画家(日本画・洋画)、版画家(伝統木版画で彫師・摺師を監督して制作の「新版画」、装幀意匠家、浮世絵研究家。渡邊庄三郎提唱の新版画運動に賛同し、版画制作に本格的に取り組んだ。徹底した浮世絵研究に根ざした制作で、気品ある格調高い版画が持ち味となった。1881(明治14)年12月21日(戸籍上の生年として確認。従来、生年1880年とするは誤り)鹿児島市樋之口(てのくち)町百番地に生れ、名は清(きよし)。父兼満、母ヨシの三男で長兄に貢(後に外交官)、次兄に半次郎(後に日本郵船技師)、妹トミ。父が書画刀剣を好み、四條派の流風を画技とした、その影響下に、男三兄弟共に絵画に関心を寄せ終生絵画談を好んだ。1899年鹿児島県立鹿児島中学

を卒業し、その夏に両兄を頼って上京し本郷団子坂に住む。はじめは橋本雅邦の門に入り日本画を学ぶが、遠縁に当たる黒田清輝の口添えで、赤坂溜池の白馬会にも通い西洋画を学びつつ、1900年第8回絵画共進会に「橋口五葉」の名で日本画3点入選。同年9月東京美術学校予備課程甲種入学。1901年東京美術学校西洋画科本科に入学。同学年選科に和田三造、二年選科に青木繁・熊谷守一・橋本邦助らが入る。1902年9月第7回白馬会展に油絵3点出品。在学中に様々な懸賞図案募集に応募し賞金を得る。長兄貢がかつて第五高等学校で夏目漱石の薫陶を受けていたことから、漱石が英国留学から帰国後に再び交流が頻繁となり、これに五葉も加わり、漱石の勧めで俳誌『ホトトギス』へ継続的に挿絵を描いた。1905年7月東京美術学校西洋画科本科卒業。同年出版の夏目漱石著『吾輩ハ猫デアル』の装幀意匠を担当。以後漱石の著書(一連の通称「漱石本」)の装幀を行う。他に泉鏡花の鏡花本装幀も多くを手がけ、永井荷風・森鷗外・谷崎潤一郎・与謝野晶子・小杉天外・正宗白鳥・内田魯庵・鈴木三重吉・森田草平らの単行本を手がけた。傾向としては翻訳ものの装幀が多い。没年まで装幀の仕事を継続し、特に木版を使用したものに優れたものがある。画業では、1907年東京府主催の勸業博覧会に装飾油絵二枚衝立《孔雀と印度女》を出品し二等賞牌を受ける。同年の第1回文展に西洋画《羽衣》を出品し入選。1911年夏、大分県別府・耶馬溪を旅行し、後の五葉版画に関わるスケッチを残す。大正期にかけては無声会に所属して作品を出品し、《黄薔薇》の名作を得た。

装幀で名高い「初山書店・胡蝶本叢書」は明治末から大正にかけて(色違い3種)24冊発行。この時期が装幀の最盛期であった。イラスト・デザイン等では、三越呉服店主催懸賞広告画募集に応募の《西洋画図案此美人》が第1等受賞、三越の新時代を飾る美人画ポスター(三間印刷製)となり当時の話題となった。他に、日本郵船の海外航路ポスターやチラシ、岩波書店の商標や広告をも担当した。持病の脚気に苦しみながら、裸婦デッサンや浮世絵研究に力を入れ、1914年『美術新報』へ浮世絵研究の論文掲載を開始する。その最初は広重研究であり、全盛時錦絵、歌麿、春信と続く。1915年渡邊庄三郎の勧めで特大判版画《浴場の女》の版下絵制作に取り組み、「試作」として完成し、これが「新版画」活動の第一作となる。版画としての完成は翌年の1916年1・2月頃とされる。しかし、反省材料が多く、彫摺技術、顔料等の基本研究、そしてデッサンへ一層力をいれて渡辺の協力を得ながら「私家版」での版画制作へむかう。1919年に《耶馬溪》《化粧の女》を制作。12月頃に神戸・京都を旅行し、翌年発行の版画制作に向けてのスケッチを成す。1920年は10点の版画を完成させた奇跡的な年となる。以下は版下絵制作の月で、1月に《雪の伊吹山》《神戸之宵月》《京都三條大橋》《盆持てる女》、2月に《紅筆を持てる女》、3月に《髪梳ける女》、5月に《長襦袢を着たる女》、6月に《夏衣の女》、7月に《浴後の女》、8月に《鴨》で、これらはこの年の内に版画として完成することが出来た。しかし10月に版下絵を描いた《手拭持てる女》は校正未了中に五葉死去となり、摺り合わせと指示書きに基づき藤木菊久磨によって没後完成した。なお、この他に雑誌や単行本の木版口絵となった小品版画もある。1921(大正10)年2月24日、疲労と風邪がもとで中耳炎から脳膜炎を併発し東京で逝去。『浮世絵之研究』第2号は五葉追悼号となり、10月には高島屋呉服店楼上で日本浮世絵協会主催「故橋

口五葉画伯遺作及び遺品浮世絵版画展覧会」が開催され、そのポスターは交友のあったフランク・ロイド・ライトによるものであった。急死に伴い、生前に完成出来た版画は13点、没後完成1点、主版墨摺りまでで未完成が《温泉宿の女》《ふところ鏡》《蜩籠持てる女》の3点、《着物をたたむ女》《爪を切る女》の2点は版下絵制作のままであった。後に長兄貢の長男橋口康雄によって、版木（主版、色版）が残っていた作品の後摺りと、主版だけの遺品に若干の彩色摺を施したもの、版下絵だけであった作品を主版制作墨摺りと若干の彩色摺りを施したものを若干を作り頒布した。錦絵復刻では、五葉監修『浮世風俗やまと錦絵』（全12輯 日本風俗図会刊行会）、『錦絵名画集』（複製木版画集 日本風俗図会刊行会）、『広重保永堂板東海道五十三次』（木版複製全六十図 岩波書店）、『歌麿筆浮世絵』（木版複製全48図 岩波書店）などがある。【文献】『生誕130年 橋口五葉展』図録（千葉市美術館・鹿児島市美術館 2011）（岩切）

橋口重晴（はしぐち・しげはる）

大分県師範学校の図画教師武藤完一は、1931年の夏休みに平塚運一を講師に招き、版画教育講習会（大分県師範学校第3回夏期図画実技講習会 8.3～7 参加者29名）を開催。武藤はこれを機に版画同人誌『彫りと摺り』（1931～1933 8冊）を創刊する。橋口は講習会に参加し、同誌第1号（1931.9）に《風景》を発表。その後、朝鮮の京城に渡り、高等学校の教師をしていたとの情報もあるが、確認できず。【文献】「創作版画講習会其他版画展等」『郷土図画』1-5（大分県美育研究会 1931.10）／『創作版画誌の系譜』（加治）

橋口康雄（はしぐち・やすお） 1903～1973

1903（明治36）年8月15日鹿児島市に生れる。父は橋口五葉の長兄の貢（みつぎ）、母はセツ（川上家）。長男で、妹ユキ、弟兼夫がいる。1909年頃、鹿児島を引き払い母と兄弟共に父のいる東京赤坂の居に移る。隣家の五葉（清）宅とつながっており、生活を共にする。1922年私立名教中学校卒。その後、東京美術学校洋画科本科入学し、1928年同校卒業。在学時は、藤島武二に師事し、小磯良平を最も親しい友とし、他に荻須高德・猪熊弦一郎・牛島憲之・山口長男らと同窓であり、のちに「上社会」結成。1930年聖徳太子奉賛美術展に油彩画《少女》が入選。1932年には渡欧、9月にロンドン・ノーウッド美術学校図案科入学、翌年2月にはゴールドスミス美術大学版画科に入学し銅版のスタンレー・アンダーソンに師事。1935年2月英国をたち、パリ・ナポリを経て帰国の途に就く。11月18日帰朝（留学中のことは『美術手帖』1950年1月号に寄稿）。1936年光風会（光風会会友）及び上社会に油絵・エッチングなど出品。1939年5月、三木辰夫・染木煦との「版画三人展」（日動画廊）開催。東京の公立中学校美術教師をしていた時期もあり、兵役として召集時もあった。エッチング・リトグラフ・ステンシル・木版などの版画を作成。終戦日の翌日8月16日に弟兼夫（國學院大學講師）が教え子たち出征学徒への責任を痛感し自刃、大いに衝撃を受ける。1949年2月には連刊版画集『ばれん』（ばれん会刊行）を康雄が中心になり、旭正秀・染木煦・織田一磨・川合喜二郎らと2号まで刊行する。1948年頃、橋口五葉遺作版画の完成をめざし「橋口五葉版画研究所」設立と資金集めの目的で油彩画頒布の「橋口康雄画会後援会」を善福寺に結成。橋口五葉の版画

作品の再版及び未完成版画作品の完成をめざして活動。1973（昭和48）年7月26日鹿児島県始良郡加治木の自宅で逝去。【文献】『日本近代銅版画展』図録（西宮市大谷記念美術館 1982）／岩切信一郎『橋口五葉の装釘本』（沖積舎 1980）（岩切）

羽柴忠弘（はしば・ただひろ） 1894～1989

1894（明治27）年三重県津市に生まれる。1916年京都高等工芸学校図案科（現・京都工芸繊維大学）を卒業。1920年に桑名郡立高等女学校（現・三重県立桑名高等学校）の美術教師となる。早い時期から銅版画に関心があったようで、1935年にエッチングプレス機を所有。1937年8月三重県鈴鹿市の県立神戸中学校において西田武雄を講師に招いて開催した夏期エッチング講習会に参加している（作品は未見）。同講習会については、『エッチング』第58号（1937.8）に会場となった神戸中学校の教員・谷徳蔵による「エッチング講習會之記」が掲載されており、それによると県内の小中学校の教諭・訓導など25名が参加したという。羽柴は永年勤務の桑名高等学校を1956年に退職するが、1953年頃より戦前の桑名を偲ぶ風景版画の制作に着手、木版画集『桑名百景』（全68図 桑名市博物館所蔵）や『桑名風物誌』（刊年不明 20図）などの木版画集を制作している。1989（平成元）年逝去。【文献】『桑名市史』本篇（桑名市教育委員会 1959）／『山田書店新収目録』34（1998.10）／鈴木亜季『羽柴忠弘略歴』（桑名市博物館 2017.11）／『エッチング』33・57・58（樋口）

橋本興家（はしもと・おきいえ） 1899～1993

1899（明治32）年10月4日鳥取県八頭郡船岡村字船岡（現・八頭町）に生まれる。1920年鳥取県師範学校を卒業し、小学校訓導となる。1921年東京美術学校図画師範科に入学し、田辺至・平田松堂に師事する。1924年に同校を卒業し、富山県立女子師範学校及び併設されていた同県立高等女学校の教師となる。翌年上京し、東京府立第一高等女学校（現・都立白鷗高校）教師となり、31年間同校で教鞭をとり、1956年に退職する。その間、臨時教員養成第一高女支所主任、公立学校教員免許法認定講習講師、第1回アチーブメントテスト問題作成委員、公立学校使用教科書採択委員など東京都教育委員会の仕事や文部省の教科用図書検定調査審議会委員を歴任するなど、教育界に足跡を残す。版画は平塚運一に木版の指導を受け、1937年の第12回国画会展に《城》が初入選。また、同年の第6回日本版画協会展にも《江見風景》が入選。以後、両展を中心に作品を発表。さらに翌1938年には第2回新文展に《古城、ろの門》を出品し、初入選。以後、第3回展（1939）・紀元2600年奉祝美術展（1940）、第4・6回展（1941・1943）にも入選した。その間、1940年の第15回国画展に出品した《二の丸附近》で褒状を受けている。また、同年には版画誌『朱美之集』第1冊（1940.5）に木版画《紅葉天守》を発表。12月には日本版画協会展の会員となる。平塚の編集による版画同人誌『きつつき版画集』昭和17年版（1942.8）に《雪の彦根城》、昭和18年版（1943）に《彦根城》を発表した。1943年5月の「日本版画奉公会」の設立に伴い理事に就任するが、10月には斎藤清・小野忠重らと辞任。翌1944年最初の画文集『日本の城』（文・岸田日出刀 加藤版画研究所）を刊行。戦後は、1946年3月の第1回日展に《牡丹》、10月の第2回日展に《アルプスと城》を出品したが、以後は官展への出品はない。同年木版画集『古城十景』（加藤版画研究所）

を刊行。1949年国画会会員となる。1957年の第1回東京国際版画ビエンナーレ展に《菱の門》を出品。以後、第3回展(1962)まで出品を続ける。また、ルガノ国際版画ビエンナーレ展(1962)などの国際公募展に出品したほか、アメリカ・ボストン美術館(1960)、イギリス・大英博物館(1962)、スウェーデン・ストックホルム(1964)等々で開催された「日本現代版画展」にも参加。1973年に日本版画協会理事長に就任し、1978年退任。1976年には国画会を退会。1978年に画集『日本の城』(講談社)を刊行する。1980年に勲四等旭日章を授章。日本版画協会名誉会員となる。1993(平成5)年8月18日埼玉県所沢市で逝去。生涯の画題である「日本の古城」シリーズは、堅牢な城郭の美しさの中に、四季折々の色彩が加わり力強くも情感豊かな作品群となっている。【文献】『橋本興家版画集』(愛媛県立美術館 1988) / 『昭和期美術展覧会出品目録 戦前篇』(東京文化財研究所 2006) / 『創作版画誌の系譜』(河野)

橋本寛齋 (はしもと・かんさい)

日本画家小野朱竹(本名益太郎、小野竹喬の実兄)が、1914年に興した版画頒布の会「版画会」の第2作目として橋本寛齋による版画作品頒布の広告が『仮面』第3巻第10号(1914.10)に掲載されている。作品は未見。因みに頒布第1作目は小川芋銭の木版画《踊り子》で、こちらは確認済。なお、橋本寛齋については、上記広告文で「日本画家」と紹介されているが、詳細は不明である。【文献】『仮面』3-10(中興館 1914.10)(樋口)

橋本関雪 (はしもと・かんせつ) 1883～1945

1883(明治16)年11月10日兵庫県神戸区坂本村(現・神戸市中央区楠木町)に生まれる。本名関一。旧明石藩の漢学者だった父橋本海関の影響で幼少から中国の古典や書画の素養を身につける。「関雪」は父が故事にちなんでつけた号。1891年片岡公曠に入門し南画を学んだ後、1903年竹内栖鳳の画塾「竹杖会」に入塾、日本画の新しい方向を探っていた栖鳳のもとで研鑽を積む。1908年第2回文展に《鐵嶺城外の宿雪》が初入選し、その後文展で入選・受賞を重ね、1919年の第1回帝展からは審査員を務めるなど官展系の画家として活躍。この間、1913年に初めて中国へ渡り、以降中国旅行は60数回におよび、中国の風物や文学に取材した作品を描く。昭和に入ると動物画を手掛け、1933年第14回帝展出品の《玄猿》が昭和天皇の直讀を得て文部省買い上げとなり、「猿の関雪」とも呼ばれた。1935年帝国芸術院会員。1945(昭和20)年2月26日京都市で逝去。版画は赤穂浪士の事跡をまとめた木版画集『義士大観』(義士会出版部 1921)に《里げしき》1図を制作している。【文献】『日本美術年鑑』1944・45・46年版(美術出版社 1949) / 『山田書店新収録美術目録』81(2008春)(樋口)

橋本錦永 (はしもと・きんえい)

1924(大正13)後半にはマヴォの同人として活動していたらしく、『マヴォ』3号(9月)にリノカット版画の《発端》を掲載している。その後、1925年4月開催の第2回無選首都展に《Die sieben siegel》《若しも事人類が》など5点を出品した。1926年5月、アナーキズムへと傾斜し「マヴォ大聯盟再建」を図るマヴォイストが組織的に参加した理想大展覧会に、《我々の母と子其他》(絵画)、《我が理想郷展標也》(構成物)などの作品4点を出品する。こ

の後マルクス主義へと転じ、全日本無産者芸術連盟(ナップ)所属の美術家として、1928年第1回プロレタリア美術大展覧会に絵画を2点と工芸作品を1点出品、1929年の第2回展に油彩画を1点出品するが撤回命令を受けた。1930年第3回展に油彩画《カニ工船》を出品、第4回展にも出品した。1940年自由美術家協会第4回展に出品。【文献】『大正期新興美術資料集成』(国書刊行会 2006)(滝沢)

橋本邦助 (はしもと・くにすけ) 1884～1953

1884(明治17)年1月2日栃木県下都賀郡栃木町(現・栃木市)に生まれる。1900年栃木中学校を2年で修了、上京して白馬会溜池研究所で洋画を学ぶ。1901年東京美術学校西洋画科選科に入学、黒田清輝・久米桂一郎らに師事。選科を2年で修了し1903年研究科に進む。在学中から白馬会展に出品し、1907年東京府勸業博覧会では油彩画《風景》が2等賞、同年第1回文展から1909年第3回文展まで連続3等賞を受賞するなど新進洋画家として注目される。この間、文芸誌『明星』第17号(1901.11)から第36号(1903.6)にかけて木村徳太郎や伊上凡骨彫刻による《月》《春の夜》等々の木版挿画をたびたび制作。1905年には白馬会の画家たち和田三造・辻永らと自画の石版画や木版画を掲載した同人美術雑誌『L. S』(エル・エス会 2冊)を発刊。第1号(1905.7)に《春の水》《牧場》、第2号(1905.8)に《ばら》の挿絵や《春雨》などの絵葉書の口絵を掲載。また石版画工同人たちの研究団体・虹交会の会報『虹』(月刊 1908.7～1910.3)の第1巻第8号(1908.9)に単色石版《寸暇》や白馬会の機関誌『光風』(1905.5～1908.12 12冊)の最終号第4年第2号(1908.12)に木版挿画《そばやの入り口》などを制作している。また、博文館などの雑誌社から挿絵や口絵の依頼も多く、田山花袋著作本の装丁・口絵の制作や花袋が主筆を務めた投稿雑誌『文章世界』(博文館 204冊)に1906年9月から1916年2月にかけて、およそ80冊の表紙絵と10冊以上の口絵(石版刷を含む)を手掛けるなど、当時挿絵画家・装丁家としても知られる存在で、1911年にこれら新聞・雑誌に掲載した挿画を集めて木版挿画集『邦助画集』(画報社)を刊行している。1910年油彩画研究のために渡仏、1年間フランス各地をめぐり1911年帰国。同年の第5回文展に滞欧作の油彩画《凝視》を出品するが、この頃から日本画の制作に熱心となり、1913年第7回展には日本画部第二科に《夕月》《落葉搔き》、第10回展(1916)に《湖畔の春色》、第11回展(1917)に《菊花の秋》(二曲一雙)の日本画を出品するなど、一時期日本画へと傾斜する。1923年再び渡仏。1924年帰国後は第8回帝展(1927)に再び油彩画《けしの花》を出品し、洋画へと回帰。第15回展(1934)まで油彩画を連続出品し、改組後の新文展にも油彩画の出品を続けた。1944年空襲を逃れて長野県上山田に疎開、画壇から離れ戦後も同地にとどまるが、1951年東京に戻り、1953(昭和28)年1月7日逝去。【文献】『橋本邦助と初期文展』図録(栃木県立美術館 1978) / 山田悦子『『明星』の挿画・森登『『光風』目録』『近代日本版画の諸相』(中央公論美術出版 1998) / 『橋本邦助』図録(とちぎ蔵の街美術館 2006) / 『創作版画誌の系譜』(樋口)

橋本邦三 (はしもと・くにぞう) 1881?～1907

大山街道溝之口(現・神奈川県川崎市溝口)にあった小間物商丸屋の次男として生まれる。幼くして父を亡くすが、家は裕福であった。後に陶芸家となった浜田庄司

とは親戚関係にあり、浜田は小学校入学前まで、溝口の祖父母の家（母親の実家）に預けられ、橋本のアトリエに遊びに行き、写生に同行することも多かった。橋本について浜田は「いつでもハイカラで新奇なものを身につけていた」と回想している。また、多摩川の向こう岸にできた異人館を真似て作ったという橋本のハイカラなアトリエには「石井柏亭・鶴三兄弟や山本鼎・倉田白羊などがたびたび遊びの来ていた」と記している。橋本は、始め日本画を田口米作に師事し、後に白馬会研究所と東京美術学校で西洋画を学んだ。1902年の美術学校入学時に山本鼎と知り合い二人で間借りし、その後は山本が借りた家に同居した。1903年には谷中清水町の石井柏亭の家に山本と下宿。石井家では毎晩のように友人が集まり盛んに議論を戦わせ、『方寸』の仲間となる友人たちと、特に山本とは多くの時間を過ごしている。生来、虚弱体質であり、性質は我儘で剛情あったが、言行は率直。空想的感情も強い上、想うことも多く、志は思うようにいかなかった。石井柏亭・森田恒友・山本鼎の3人が創作版画の普及を目的に創刊した美術芸雑誌『方寸』（1907～1911 35冊）の第1巻3号（1907.7）にはジंक版《おくつき》と山本鼎による追悼文「故橋本邦三君（明治四十年六月二十六日記）」が掲載されている。1907（明治40）年6月20日もしくは21日に肺疾患により郷里溝之口で逝去。享年26歳であった。他に残した作品は在学中2年間に描いた石膏デッサンなどと12～3冊のスケッチブックなどがある。【文献】山本鼎「故橋本邦三君（明治四十年六月二十六日記）」『方寸』1-3（1907.7）／「浜田庄司」『私の履歴書 文化人7』（日本経済新聞社 1984）（加治）

橋本三郎（はしもと・さぶろう）

神奈川県に生まれる。東京工芸専門学校印刷工芸科（1922年開校）の学生14名（全員が第13回生、1937年3月卒業）による版画誌『刀画』（第2号〔1935.10〕のみ確認）の編集者として同誌発行にかかわり、第2号に多色木版《静物》《首 其ノ2》の2点を制作している。同校を1937年に卒業し、山本インキ株式会社に勤務。【文献】『東京高等工芸学校一覧 昭和14年版』（1940）『創作版画誌の系譜』（樋口）

橋本静水（はしもと・せいすい） 1876～1943

1876（明治9）年1月7日広島県尾道に生まれる。本名宗次郎。正素、後に静水と号す。画家を志し上京、東京美術学校日本画科に入学し橋本雅邦に師事する。1898年岡倉天心が東京美術学校を退くに際して、雅邦らに従って同校を中退。1911年第5回文展に「正素」名で《一休》が初入選。また、院展に「静水」名で第1～19・21～23・25～27・29回展（1914～1942）まで出品。1914年に院友となり、1916年同人に推挙される。橋本雅邦の娘婿として雅邦塾「二葉会」の幹事を務めるなど同会の中心的画家として活躍。花鳥画・人物画を得意とした。1943（昭和18）年9月11日東京で逝去。版画は赤穂浪士の事跡をまとめた木版画集『義士大観』（義士会出版部 1921）に《鴨立澤の旅合羽》1図を制作している。【文献】『日本美術年鑑』1944・45・46年版（美術出版社 1949）／『山田書店新収録美術目録』81（2008春）（樋口）

橋本 襄（はしもと・のぼる）

1931（昭和6）年に加藤版画研究所より木版画『花鳥

十二ヶ月』（各36×16cm 12図）の制作がある。1930年の第11回帝展に《山王の暮雪》で入選もつ日本画家だが、詳細は不明である。【文献】『加藤版画研究所四十余年作品の歩み』（刊年不詳）（樋口）

橋本文雄（はしもと・ふみお）

川上澄生が英語教師をしていた栃木県立宇都宮中学校（現・県立宇都宮高等学校）5年に在学中、廃刊となっていた同校生徒発行の版画誌『刀』（1928～1932 13冊）を再刊しようと加地春彦・小松行高ら5年生が中心となって版画誌『刀 再版』（1940～1941 5冊）を創刊。それに参加し、第1号（1940）に《へちま》を発表するが、この号のみの参加となった。【文献】『創作版画の川上澄生』展図録（鹿沼市立川上澄生美術館 2002）／『創作版画誌の系譜』（加治）

橋本義夫（はしもと・よしお）

1932（昭和7）年東京美術学校西洋画科に入学。油彩画を学ぶ傍ら、1935年5月に開設された臨時版画教室でエッチングを学んだものと思われ、1936年の第5回日本版画協会展に銅版画《婦人像》が入選。1937年同校油画科を卒業し、研究科に進んだが、版画教室エッチング部にも在籍した（『東京美術学校版画教室エッチング部名簿』『エッチング』57）。なお、同年の『エッチング』第59号（9.15発行）には《〔女性像〕》の図版が掲載されている。1972年頃は東京都大田区上池台に住む。【文献】『東京芸術大学百年史 東京美術学校篇 第三巻』（ぎょうせい 1997）／『昭和期美術展覧会出品目録 戦前篇』（東京文化財研究所 2006）／『エッチング』57・59／『同窓生名簿 東京美術学校 東京芸術大学美術学部 東京芸術大学大学院美術研究科 昭和47年版』（1972.12）（三木）

長谷川勝三郎（はせがわ・かつさぶろう） 1912～2001

1912（明治45）年2月9日栃木県上都賀郡鹿沼町（現・鹿沼市）に生まれる。1924年栃木県立宇都宮中学校（現・県立宇都宮高等学校）に入学。日光に遠足の際、自邸「掬翠園」の千社札を貼っていたところ、引率の川上澄生に声をかけられる。以来、川上の自宅を訪れ版画の手ほどきを受けるようになる。1928年版画の好きな仲間たちと共に、版画誌『刀』を創刊。第4輯まで発行の世話役をした。『刀』には、第1輯（1928）に《りす》、第2輯（1928）に《橋のある風景》、第3輯（1928）に《静物》、第4輯（1929）に《工場風景》、第5輯（1929）に《中央气象台風景》、第6輯（1929）に《聖橋風景》、第7輯（1930）に《風景》、第8輯（1930）に《風景》を発表。1930年川上のすすめで東京高等工芸学校（現・千葉大学）印刷工芸科に入学。谷中安規など創作版画家たちと交流を深める。『刀』以外の創作版画誌には、『さとぼろ』第26号（1928.12）に《風景》、『版画』（素描社）第2号（1929.9）に《气象台風景》、第5号（1930.5）に《女学生》、『版画 CLUB』第1年第4号（1929.8）に《風景》、第2年第2号（1930.2）と第4年第2号（1932.2）に年賀状、『きくづ』第4号（1930.2）に《自画像》、第6号（1930.4）に《ニコライ堂》、第10号（1930.8）に表紙、《風景》カット《花》、第2巻第1号（1931.1）に《静物》、第2巻第3号（1931）に《聖橋風景》、『版芸術』第9号（1932.12）と第21号（1933.12）に年賀状を発表、以後創作活動からは遠ざかる。1933年、『東京日日新聞』に連載されていた中里介山の小説「大菩薩峠」の挿絵（石井鶴三作）に魅せられ、東京日日新聞社（現・

毎日新聞社)に入社。毎日新聞東京本社技術部長を経て、1965年取締役東京本社印刷局長。1972年日本新聞インキ株式会社代表取締役社長。1983～1986年日本書票協会会長。1988年毎日新聞社顧問。一方で、1933年から本格的に川上澄生作品の蒐集を開始。川上の創作活動を側面から支え、質・量ともに随一のコレクションを築いた。蒐集した川上澄生の全作品を鹿沼市に提供し、1992年9月鹿沼市立川上澄生美術館開館。名誉館長に就任。2001(平成13)年8月28日東京都で逝去。【文献】『開館記念特別展 若き日の川上澄生』展図録(鹿沼市立川上澄生美術館 1992)／『コレクター長谷川勝三郎と川上澄生』展図録(鹿沼市立川上澄生美術館 2005)／『創作版画誌の系譜』(早川)

長谷川 潔 (はせがわ・きよし) 1891～1980

1891(明治24)年12月9日神奈川県久良岐郡戸太村大字戸部(現・横浜市西区御所山)に生まれる。1903年父が逝去。1910年麻布中学校を卒業、この年母が逝去。1911年東京赤坂の葵橋洋画研究所で黒田清輝に素描を学び、翌年には本郷洋画研究所にも通って岡田三郎助と藤島武二に油彩画を学んだ。またこの頃から木版画を制作し始め、翌1913年に、永瀬義郎とともに文芸同人誌『聖盃』(のちに『仮面』と改題)の表紙絵や口絵、挿絵として象徴主義的作風の木版画を制作し、版画家としてデビューする。1914年短歌誌『水甕』の表紙絵を木版画で制作。1916年永瀬義郎・広島新太郎とともに版画家グループ「日本版画倶楽部」を結成し、創作版画展を開催。1917年日夏耿之介詩集『転身の頌』の装丁と木版画による挿絵制作を手掛ける。この年堀口大学と知り合い、この後詩集の装丁と挿絵制作を行なう。1918年12月に横浜港からアメリカ経由で渡仏、途中ニューヨークで山田耕筰と会い、1919年4月パリに着く。この年9月から1922年初めまで静養と制作のため南フランスで過ごす。パリに住居を定め、イギリス製のベルソーを入手し、当時忘れ去られていた銅版画の古典技法であるマニエール・ノワール(黒の技法、英訳はメゾチント)の技法研究を始める。1923年よりサロン・ドートンヌほかの展覧会に油彩画や版画を出品。1924年にはデュフィの勧めでソシエテ・デ・パントル・グラヴール・アンデパンダンに入会し、解散する1935年まで毎年出品した。1925年初めての個展をパリの画廊で開催、交差線による下地のマニエール・ノワールの風景画を発表。またこの年からエングレーヴィングの作品を制作し始める。1926年サロン・ドートンヌの会員。1927年フランス人美術商のエルマン・デルスニス開催の仏蘭西現代美術展に出品され、渡仏後の作品が日本で紹介される。1928年日本の春陽会会員。1930年パリで開催の第1回「航空と美術」国際展に《アレキサンドル三世橋とフランスの飛行船》などの銅版画を出品し、航空大臣1等賞を受賞。1931年日本版画協会創立会員。1933年本野盛一仏訳によるエングレーヴィングによる挿絵本『竹取物語』を刊行。1934年パリ装飾美術館での「日本現代版画とその源流展」の開催に尽力。1935年フランス政府よりレジオン・ドヌール勲章を授与された。1937年ソシエテ・デ・パントル・グラヴール・フランセ会員。1939年第二次世界大戦勃発によりサルト県の斎藤豊作邸シャトー・ド・ヴェヌヴェルに疎開。その後終戦まで戦争に翻弄され、耐乏生活と病気に苦しみながらの生活のなかで制作を続けた。1945年6月には在留邦人としてドランシー収容所に収監されるが、フランス人有力者の力で

釈放、しかし心身に大きな打撃を受けた。1946年より油彩画を中心に創作活動を再開し、戦後もパリを拠点に創作・発表活動を展開した。作品のなかでは、マニエール・ノワールによる静物画が、厳密な画面構成にもとづき、東洋的で高雅な黒色から静物を浮かび上がらせた深淵で神秘的作風の版画として高い評価を受ける。また、秋草を中心に、グラスに挿したさまざまな野草をモチーフとしたエングレーヴィングによる一群の作品も、練達した清潔感のある黒線からなる清澄、典雅な作品として評価される。それらの作品に描いたほとんど見向きもされない自然の枯草に長谷川は、「不思議な旋律」や「精妙の確なりズム」、そして「宇宙の玄妙かつ純粋な律動」といった自然の摂理を見出し、さらにそうした摂理に普遍的な秩序を直感して作品に表現しようとした。1964年フランス学士院芸術アカデミーのコレスポンダン会員に選出、1966年フランス文化章を受章、翌1967年パリ市金賞牌、日本で勲三等瑞宝章を授与された。日本では1980年6月から8月に京都国立近代美術館で自選による「銅版画の巨匠 長谷川潔」展が開催された。渡仏後日本に一度も帰国することなく1980(昭和55)年12月13日パリで逝去。【文献】『長谷川潔版画作品集』(美術出版社 1981)／『長谷川潔の全版画』(冷風書房 1999)／猿渡紀代子「長谷川潔の世界」上・中・下(有隣堂 1997・1998)(滝沢)

長谷川小信(初代)(はせがわ・このぶ) しょうだい 1848～1940

嘉永元(1848)年〔大坂〕に生まれる。浪花の浮世絵師・初代長谷川貞信の長男で、名は徳太郎。父貞信に絵の手ほどきを受け、父の勧めで歌川芳梅に師事する。慶応3(1867)年頃から「初代小信」を、1875(明治8)年から「二代目貞信」を名乗る。役者絵を主とし、京阪神の開花期の風俗や風景画、錦絵新聞なども手がけた。木版のほか銅版画の制作もあったといわれるが、未見。1940(昭和15)年逝去。【文献】『木版画の近代－伝統と創作－』展図録(長野県信濃美術館 1999)／北川博子「長谷川小信」『浮世絵大辞典』(東京堂出版 2008)(樋口)

長谷川小信(二代)(はせがわ・このぶ) にだい

初代長谷川貞信の次男(初代長谷川小信の弟)で、兄徳太郎の跡を継いで「二代目小信」を名乗ったとされるが、早世。詳細は不明。【文献】北川博子「長谷川小信」『浮世絵大辞典』(東京堂出版 2008)(樋口)

長谷川貞信(三代)(はせがわ・さだのぶ) さんだい 1881～1963

1881(明治14)年〔大阪〕に生まれる。二代目長谷川貞信(初代小信)の長男で、本名信太郎。1894年に「三代目小信」を襲名、1931年上方郷土研究誌『上方』の表紙絵を父の2代目貞信とともに担当。1940年父の逝去とともに「三代目貞信」を名乗る。道頓堀各座の番付や役者の似顔絵集、『猿飛佐助真田家三勇士』など講談師玉秀斎の語りを山田阿鉄が筆記して人気を博した立川文庫の口絵などを手がける。その他一枚摺の木版画と思われる《お宮参り》(刊年不詳)や木版画集『日本名物 大阪文楽座人形集』第1段～第10段(版画会 1926 人形30図・舞台図10図)・《本朝廿四孝》・『京の大原女五題』(いずれも内田版 刊年不詳 未見)などがある。1963(昭和38)年逝去。【文献】山田奈々子『木版口絵総覧』(文生書院 2005)／北川博子「長谷川小信」『浮世絵大辞典』(東京堂出版 2008)(樋口)

長谷川武雄 (はせがわ・たけお) 1904～1987

1904(明治37)年新潟県北蒲原郡新発田町(現・新発田市)に生まれる。新発田中学校卒業。1924年新潟県師範学校を卒業し、新発田尋常高等小学校教員となる。富樫甚平・寅平に油彩画を学び、1926年佐藤哲三・富樫寅平らとグループ「野人社」を結成、野人社展を開催する(1928年第3回展まで)。また1927年秋に佐藤哲三の長兄・佐藤重義(号十蟻)が富樫寅平らと新発田の文芸誌『郷土』の仲間に呼びかけて生まれた同人文芸誌『土塊』(1927.12～1929.1 7冊)に第2号(1928.1)より参加、同号に『風景』[単色木版]、第3号(1928.3)に『赤倉風景』[単色木版]、第4号(1928.5)に『風景』[単色木版]、第6号(1928.11)に『風景』[単色木版]を掲載する。その後1930年第17回光風会展に油彩画《池の風景》、1935年第10回国展に油彩画《寒月》が入選するなど新発田で小学校教員の傍ら制作を続けた。1947年から1958年まで紫雲寺小学校校長を務め、北蒲原・新発田図工教育研究会会長や1970年から1976年まで下越美術会会員などとして地域美術の振興に尽す。1987(昭和62)年逝去。【文献】『佐藤哲三の時代』展図録(新潟県立万代島美術館 2008)／『創作版画誌の系譜』(樋口)

長谷川多都子 (はせがわ・たつこ) 1904～没年不詳

1904(明治37)年に生まれる。本名は辰子。女子美術学校卒業。早田楽斎と岡田三郎助に学ぶ。加藤潤二「版画家めぐり 長谷川多都子氏の巻」によれば、木版画を始めたのは1928年頃で、第一作は《麦の穂》だという。1929年第10回帝展に《女湯》が初入選、以後第11回展に《賑ひ》、第12回展に《溶解窯》、第13回展に《柘榴》、第15回展に《天浮羅》が入選。しばしば大画面に展開したダイナミックな造形が高く評価され、帝展に入選を重ねた女性版画家として注目された。日本版画協会でも1932年の第2回展で《朝湯》が初入選して会員となり、翌年の第3回展にも《おんな湯》《舞子》を出品している。昭和初期には小説挿絵も手がけ、1932年に麹町絵画研究所の女子部を担当したとの記録も残る。なお夫は日本版画社を主催した長谷川常生であり、同社が刊行した『続創作版画名作集』にも作品を寄せている。前述した「版画家めぐり…」では彫師と摺師を用いた制作への移行が仄めかされており、事実加藤版画店から版行された1935年の《街の湯》も知られる。1937年の末には日本版画協会の会員名簿から削除されており、この頃には版画制作から遠ざかっていたと推測される。【文献】加藤潤二「版画家めぐり 長谷川多都子氏の巻」『浮世絵藝術』3-10(1934.11)／『日本版画協会々報』24(1938.1)／『日本美術年鑑』昭和14年版(美術研究所 1940)(西山)

長谷川 弘 (はせがわ・ひろし)

1920(大正9)年の第2回日本創作版画協会展に木版画《自画像》《ピアノ》《教会》が入選。出品時は東京に住む。【文献】『第二回版画展覧会「東京展」目録』(日本創作版画協会 1920)／『大正期美術展覧会出品目録』(東京文化財研究所 2002)(三木)

長谷川路可 (はせがわ・ろか) 1897～1967

1897(明治30)年7月9日東京に生まれる。本名杉村龍三。1907年両親の離婚で母方の長谷川姓となる。1910年暁星中学校に入学。15歳で第1回再興日本美術院展(1913)に水彩画《浜辺にて》が入選。1914年カトリック

に入信する、受洗名はルカ。翌1915年同中学校を卒業、同年の第2回院展に水彩画《工場の裏》が入選。1916年東京美術学校日本画科に入学し、松岡映丘に師事する。同年の第3回院展にも水彩画《石山朝鮮風景》が入選する。1919年第1回帝展に日本画《ジェロニモ次郎祐信》が入選。1921年同校卒業。卒業制作に細川ガラシアを描いた日本画《流さるる教徒》で「路可」の号を用いる。卒業と同時に洋画修得のために渡仏しパリでシャルル・ゲランに師事。また結城素明らの勧めでギメ美術館や大英博物館らの敦煌西域壁画を2年半かけて模写し、その後フレスコ画と西洋服飾史を学んで1927年帰国。帰国後は、松岡映丘が結成した「新興大和絵会」(1921設立)に参加し、同会第7回展(1927)から第10回展(1930)までフレスコ画や日本画を出品する。1930年佐々木松次郎らと「カトリック美術協会」を結成し、第1回展(1932)から第10回展(1949)までキリスト教をテーマにした日本画を出品。また帝展に第12回(1931)から第15回(1934)まで日本画を出品する一方で、帰国翌年の1928年に利光鶴松が北多摩郡狛江町に建てた私的聖堂(後の東京教区カトリック喜多見教会)にフレスコ壁画を制作。以降国内において徳川義親邸装飾壁画など多数の施設にフレスコ壁画を制作する。戦後は1951年イタリアに渡り、支倉常長が初めてイタリアに上陸したチヴィタヴェッキアの日本聖殉教者協会聖堂に《日本二十六聖人殉教図》や《聖母子像》などの壁画を足かけ7年かけて完成し、1957年に帰国。1958年武蔵野美術大学本科芸能デザイン科講師として服飾史を教えながら油絵科などの学生と共に壁画集団「F・M」(Fはフレスコ、Mはモザイク)を結成し後進の育成指導にあたる。壁画集団「F・M」と協同しながら旧国立陸上競技場メインスタンド壁や長崎日本二十六聖人記念館など多くの施設にフレスコ・モザイク壁画を制作した。1967年ローマ法王パウロ6世の招聘を受けてイタリアに赴き、法王謁見直後の7月3日脳梗塞のためローマで急逝する。版画の制作は、新興大和絵会同人時代、新大和絵の手法による伝統的な日本木版の再興を図って1928年に刊行された木版画集『大和絵 日本八景』(大和絵絵画刊行会 全8図 小倉四郎彫・西村熊吉摺)に《狩勝峠》1図を制作。また未見だが、『長谷川路可画文集』の年譜によると、1930年12月に銀座資生堂ギャラリーで開催の「世界一周スケッチ展」にエッチング《ループル橋と美術館》1点を出品している。【文献】『長谷川路可画文集』(求龍堂 1989)／『山田書店新収目録』22(1995.7)／岩切信一郎「日本近代版画資料集成(1923～1929)」『東京文化短期大学紀要』19(2002.3)(樋口)

秦 紫水 (はた・しずい)

1920(大正9)年頃に、木版楽譜(『新作小唄』の1点か?)の表紙絵を制作している。【文献】『山田書店新収目録』40(2000.4)(樋口)

幡 恒春 (はた・つねはる) 1883～1944

1883(明治16)年丹後宮津(現・京都府宮津市)に生まれる。本名広瀬晴道。幡小左衛門の養嫡子となり1909年から幡姓を称す。稲野年恒・赤松麟作・右田俊英らに師事。神戸新聞・大阪日報をへて1905年大阪朝日新聞社に入社。1922年までの16年間、渡辺霞亭・長恨生・沖野岩三郎・吉屋信子などの新聞小説挿絵を担当する。明治から昭和にかけて浮世絵系挿絵画家として知られた。1944(昭和19)年4月17日逝去。版画の制作は、1917年5月から8

月にかけて、赤松麟作・野田九浦・水島爾保布・永井瓢齋らとともに金尾文淵堂から出版された木版画集『阪神名勝図絵』(全30図 大倉半兵衛彫刻)に《今津》《香櫨園》《魚崎》《神戸》(南京町)《六甲山》《寶塚》の6図を制作している。【文献】『此花』第七枝(雅俗文庫 1910.7) / 『阪神名勝図絵～市外居住のすゝめ～』展図録(芦屋市立美術博物館 2005) / 『版画堂目録』116(2017.3)(樋口)

秦 徳三(はた・とくぞう)

徳力富吉郎に版画の指導を受け、徳力が主宰する「丹緑会」の同人誌『版・小品集』(丹緑社 1932頃か)に木版画《[みっちゃん]》(和服の女性像)を発表しているが、詳細は不明。【文献】岡田毅「京都における創作版画の展開」『資料館紀要』12(京都府立総合資料館 1984.3) / 『版画堂目録』112(2016.6)(樋口)

畑 路二(はた・みちじ)

東京の料治熊太が発行していた版画誌『白と黒 第一次』(1930～1934 50冊)の第25号(1932.7)に花をモチーフにした《習作》を発表。以後作品は確認できず。【文献】『創作版画誌の系譜』(加治)

畑 守人(はた・もりと) 1919～

1919(大正8)年7月15日長野県西筑摩郡(現・木曾郡)日義に生まれる。長野県師範学校一部4年に在学中、同校生徒による版画誌『樹水』(1938～1940? 4冊)の第1号(1938)に《自習室》を、5年に進級し、第2号(1940)皇紀2600年版に《イテツノ木》[ママ]を発表する。1940年3月に同校を卒業。1950年当時は下高井郡平穂小学校に勤務。その後、信州大学附属長野小学校・下高井郡木島中学校など10校にて教諭、教頭、校長を務める。その間、長野県教育委員会指導主事を経て、下高井教育会長・校長会会長を歴任。1978年退職後、信濃教育委員会常任理事に、その後中山晋平記念館館長を務める。1996年には勲五等瑞宝章を受章。著書に『はるかなる調べとともに 中山晋平記念館つれづれ』(北信ローカル社出版センター 1992)『物語高野辰之』(鬼灯書籍 2001)などがあり、2005年には『米寿の自画像』(ほおずき書籍)を上梓する。【文献】『樹水』1・2 / 『卒業生名簿 昭和25年』(信州大学教育学部本校 1950) / 畑 守人『晋平節考』(北信ローカル社 1987) / 畑 守人『米寿の自画像』(ほおずき書籍 2005)(加治)

畑 和人(はたけ・かずと)

長野県下高井郡中野に生まれる。長野県師範学校一部3年に在学中、同校生徒による版画誌『樹水』(1938～1940? 4冊)の第2号皇紀2600年版(1940)に《オパァサン》を発表する。1942年同校を卒業し、1950年当時は埴科郡埴生中学校(現・千曲市立埴生中学校)に勤務。【文献】『樹水』2 / 『卒業生名簿 昭和25年』(信州大学教育学部本校 1950)(加治)

畠中幸吉(はたなか・こうきち)

慶應義塾普通部3年に在学中、西田武雄主宰の日本エッチング研究所機関誌『エッチング』第73号(1938.11)に山の風景を描いた銅版画を発表。同校にはエッチング教育に熱心な教師仙波均平がおり、毎年美術部生徒作品展が同校の教室で開催されていた。1938年は11月6・7日の両日に開かれ、エッチング作品約100点が展示された。

畠中の作品もその中の1点と推測される。【文献】『エッチング』72・73(加治)

畑野織蔵(はたの・おりぞう) 1908～1992

1908(明治41)年神奈川県津久井郡串川村に生まれる。神奈川県立工業学校図案科に学び、1927年上京。1930年代に畦地梅太郎を知り、木版画の制作を始める。1935年から本格的に作品発表を始め、1月の第5回NOVA美術協会展に《少女》《アコデオンを弾く男》、4月の第10回国画会展に《風景》が入選。出品時は「東京市渋谷区田毎町13」に住む。その後、小野忠重らの「新版画集団」に参加し、9月の現代版画展(新版画集団小品展即売 22～30 浅草・松屋)に《風景》《雪景》《早春風景》、12月の第5回展に《ガードのある風景》、同月の『新版画』第18号展覧会特別号(発行日不明)に《ガードのある風景》を発表。また、10月の第4回日本版画協会展に《都会風景》《河》、第1回新興美術家協会展にも《都会風景》が入選。翌1936年も4月の第11回国画会展に《風景》、5月の第5回日本版画協会展に《早春》《風景》、第2回新興美術家協会展に《初夏の島》《秋景》が入選した。新版画集団へは、10月の第6回展に《風景〔川〕》を出品したが、12月に解散。新しくスタートした「造型版画協会」へは参加しなかった。1937年は4月の第12回国画会展に《風景》、11月の第6回日本版画協会展に《海景》が入選。1938年からは「造型版画協会」に出品するようになり、3月の第2回展に《港(A)》《港(B)》《海》を出品し、新版画家賞を受賞。8月の『浮世繪界』第3巻第8号(浮世繪同好会)に、口絵木版画《海》を発表。小野忠重の「畑野織蔵君の版画」と「口絵の木版画」[無署名・榎崎宗重か]が掲載された。翌1939年には造型版画協会会員に推挙され、第3回展(1939)に《街》、第4回展(1940)に《秋景(A)》《秋景(B)》、第5回展(1941)に《海景》《海景》《湖》、第6回展(1942)に《秋果》など4点、第7回展(1943)に《ざくろ》など12点を出品。またその間、1939年の第5回新興美術家協会展に《島》が入選している。戦後は日本美術会展に出品し、また「版の会」会員になったという(小野忠重による)が、詳細は不明。1980年頃は東京都小平市に住む。1992(平成4)年2月4日逝去。【文献】小野忠重「畑野織蔵」『原色 浮世絵大百科事典』10(大修館書店 1981) / 『版ニュース』4(輝開 1998.7.3) / 『現代版画展覧会〔出品目録〕』(1935) / 『昭和十年度新興美術家協会出品目録』(1935) / 『新協展目録』(1936) / 『昭和期美術展覧会出品目録 戦前篇』(東京文化財研究所 2006) / 『創作版画誌の系譜』(三木)

波多野かず子(はたの・かずこ)

東京の文化学院では1933年秋に専修科でのエッチング講習会を行った。女学部でも翌1934年3月7日に教員の赤城泰舒の指導のもと、講師に日本エッチング研究所の西田武雄を招き、エッチングの実習(受講者10名)が行われた。女学部3年在学中の波多野も受講し、果物を描いた銅版画が研究所機関誌『エッチング』第17号(1934.3)に掲載されている。【文献】『エッチング』17(加治)

波彦野 圭(はたの・けい)

宇治山哲平は出身地大分県日田町(現・日田市)で日田郡工芸学校を卒業すると、同地の美術愛好家たちと版画同人誌『朴ノ木』(1933～? 4冊か)を発行する。波彦野は同誌第2号(1933.7)に《シマ鯛》を発表。【文献】

池田隆代「大分県における創作版画誌」(『大分県立芸術会館研究紀要』1 2002.9) / 『創作版画誌の系譜』(加治)

波彦野冬樹 (はたの・ふゆき)

宇治山哲平は出身地大分県日田町(現・日田市)で日田郡工芸学校を卒業すると、同地の美術愛好家たちと版画同人誌『朴ノ木』(1933~? 4冊か)を発行する。波彦野はその第1号(1933.4)に《オタマジャクシ》を発表。【文献】池田隆代「大分県における創作版画誌」(『大分県立芸術会館研究紀要』1 2002.9) / 『創作版画誌の系譜』(加治)

畑山行夫 (はたやま・ゆきお)

1930(昭和5)年の第3回プロレタリア美術大展覧会に版画《検束》を出品。また、1932年の第5回展には「畑山行末」の名で版画《非常時日本の旗行列》《戦場から帰った骨》を出品した。版種は不明。【文献】『昭和期美術展覧会出品目録 戦前篇』(東京文化財研究所 2006)(三木)

鉢木 信 (はちき・しん)

作品発表には「鉢木信雄」と「鉢木信」があり、初期の発表には「信雄」が使用されているため、信雄が本名と考えられる。1930年代の静岡では『かけた壺』(1930~1934 23冊)、『ゆうかり』(1930~1935 30冊)といった版画同人誌が刊行されているが、同時期に浦田儀一・真澄忠夫らが個性豊かな版画誌『版画座』(1932~1934 16冊)を発行している。その『版画座』第2年9号(通巻11)(1933.9)に木版画《築地河岸》を発表する。現在確認されている最も早い時期の作品である。以後第2年10号(通巻12)(1933.10)に《風景》、第2年13号(1933.11)に《内幸町風景》を発表。その後、発表の場を中川雄太郎主宰の『かけた壺』に移す。『かけた壺』は第16号までは版画と文学の文芸同人誌であったが、第17号からは版画同人誌となった。その第17号(1933.12)に《風景》を「鉢木信」名で発表する。以後この名を使用して、第18号(1934)に《風景》、第19号(1934)に《風景》、第20号(1934.4)に《花》、第21号(1934.5)に《ガードのある風景》、第22号(1934.6)に《蔵書票》を発表する。第19号は1934年の2月から3月に発行されたと推測されるが、あとがきには「神戸市神戸区海岸通り4丁目8」へ転居したとの記事がある。それまでの住所は1933年12月発行『かけた壺』第17号の「かけたつば同人」に「東京市京橋区銀座西7丁目5」と記載されている。また、第20号の編集後記(中川記)には「毎月御作を頂いている武藤・小林・鉢木・佐藤氏には仲間と云ふ親しみがあります」と記されている。その後、中川は『かけた壺』を第23号で終刊し、童土社発行の版画同人誌『ゆうかり』(1931~1935)に合併させ、その編集を引き継いでいる。そのため、鉢木も発表の場を『ゆうかり』に移し、その第21号(1934.9)に《船》を発表するが、以後の作品は確認されず。その後、同誌第23号(1934.11)の同人録にも神戸市神戸区の住所が記載されている。【文献】『創作版画誌の系譜』(加治)

鉢木信雄 (はちき・のぶお) ➡ 鉢木 信 (はちき・しん)

八戸喜代四 (はちのへ・きよし) 1911~1995

1911(明治44)年青森県東津軽郡平内に生まれる。1927年青森県師範学校に入学。校内の美術サークルであ

る「青師コバルト会」に入り、今純三の指導を受ける。1931年の第1回東奥美術展の第2部「中等学校作品展」に油彩画《ふるさと》《秋晴》《浪打校》を出品し、《秋晴》が特選を受賞。1932年同校を卒業。小学校教員になったと思われる。東奥美術展(第1部「一般美術展」)へは、1944年の第14回展まで連続して油彩画を中心に出品したが、第8回展(1938)は油彩画《初秋風景》とエッチング《静物》、第11回展(1941)は水彩画、第13回展(1943)は版画〔エッチング〕《小春日和》の出品であった。また、第14回展(1944)に出品した油彩画《豊年》で特選を受賞している。このエッチングは、今に手ほどきを受けたもので、1936年12月までには日本エッチング研究所製のエッチングプレスを所有していたことも確認できる(『エッチング』50)。1939年の第8回日本版画協会展にエッチング《雪景》が初入選。翌1940年の『エッチング』第87号(2.15発行)にエッチング《雪国》の図版が掲載された。その後も、第9回日本版画協会展(1940)にエッチング《いちこ〔ご〕》《雪路》《田舎の秋》、1941年の第2回日本エッチング作家協会展に《雪景》を出品。また、同年の『エッチング』第100号(6.15発行)に「エッチング誌の発展を祈る」を寄稿。1944年1月か、日本版画協会会友に推挙された。このほか、1943年と1944年の第8・9回大潮会絵画展にも出品か。戦後は、1949年の第17回日本版画協会展に《たそがれ》を再び出品。1954年の第22回展からは会友として《鐘楼》を出品。以後、第23回展(1955)に《東本願寺》《雪の故里》、第24回展(1956)に《大鰐スキー場》を出品し、1960年退会した。また、1953年に関野準一郎らが結成した「日本銅版画家協会」にも参加したが、活動の詳細は不明。1974年の第50回白日会展に《奥入瀬風景A》、第53回展(1977)に《河岸盛秋》、第54回展(1978)に《奥入瀬晩秋》を出品している。1959年頃の勤務先は青森市立浜館小学校。その後、東津軽郡平内町立内童子小学校の校長を務めたようである。1983年頃は青森市造道に住む。1995(平成7)年9月22日青森市で逝去。【文献】江渡益太郎『青森県版画教育覚え書』(津軽書房 1979) / 『青森県出身在住美術家工人等名簿』(弘前市立博物館 1983) / 『東奥美術展の画家たち—青森県昭和前期の美術—』展図録(青森県立郷土館 2005) / 『今純三・和次郎とエッチング作家協会』展図録(渋谷区松濤美術館 2001) / 『昭和期美術展覧会出品目録 戦前篇』(東京文化財研究所 2006) / 『白日会展総出品目録〈第1回~第59回〉』(白日会 1984) / 『エッチング』50・87・100・101(三木)

八田忠敏 (はった・ただとし)

長野県下水内郡の小学校教師の集まりであった下水内郡手工研究会は版画誌『葵』(1934~1938 5冊)を発行する。八田は創刊からの同人であり、第1号(1934.9)に《峠ノ町》、第2号(1935)賀状号に《池辺の鶴》、第3号(1936.7)に《朝顔》《海上雲遠》、第4号(1937.7)に《田家の雪》、第5号(1938.3)に《K駅ノ深雪》を発表。また、故人となった同人岩上行静の作品《スキー》を八田が複製し第4号に掲載していることから、編集にも関わっていたとも考えられる。【文献】『須坂版画美術館 収蔵品目録2 版画同人誌『樸』『臥竜山風景版画集』(須坂版画美術館 1999) / 『創作版画誌の系譜』(加治)

服部高治 (はっとり・こうじ)

東京の料治熊太が主宰した『版芸術』(1932~1936

58冊)の第9号「全日本版画家年賀状百人集」(1932.12)に木版画の年賀状を発表する。その賀状には海部郡南陽村畑中(現・愛知県名古屋市区畑中)の住所が記されている。「全日本版画家年賀状百人集」とあるので、版画家として活動していたと考えられるが、他の作品は確認できず。【文献】『創作版画誌の系譜』(加治)

服部光平(はっとり・こうへい) 1899～1983

1899(明治32)年、現在の岡山県笠岡市に生まれる。福山誠之館中学(現・広島県立福山誠之館高等学校)を経て、1919年、北海道帝国大学予科に入学。1922年には医学部に進学し、恵迪寮の寮長を務める。卒業後は助手、講師を務め、後に開業医(東京か?)となる。在学中に、文芸同人誌『氷河』を創刊。中学生時代から油絵・水彩画を描いており、北大美術部黒百合会にも出品。北海道帝国大学予科生外山卯三郎結成の劇団「夢幻座」への参加など、絵画・文芸・演劇へと才能を発揮する。1925年6月、外山卯三郎を中心に相川正義(詩)・伊藤義輝・宮井海平・服部などの学生や教授の斎藤護国など北大関係者8人で札幌詩学協会を結成し、詩・版画・演劇の同人誌『さとぼろ』(1925～1929 29冊)を創刊。同誌には表現主義・象徴主義などの影響を感じさせる版画類や詩を発表し、それにマレーヴィッチの芸術論を翻訳した「無対象の世界」を第1～6・13～29号に寄稿するなど、多彩な才能を開花させる。一時、『さとぼろ』を離れる時期もあったが、第19～22号の編集を担当した際には、判型を大型化し、総合的な雑誌から詩と版画的同人誌に回帰。同時に紙質にもこだわった美しい誌面創りにも挑戦して、『さとぼろ』刊行に尽力した。第1号(1925.6)に《イロニー》《静物》と詩、第2号(1925.7)に《静物》とエッセイ、第3号(1925.8)に《釧路の秋》と詩やエッセイ、第4号(1925.9)に《雨日小景》と詩・展評、第5号(1925.10)には詩のみで版画の発表はないものの、第6号(1925.11)には《静物》と詩を、それ以降も第13号(1926.11)から29号(1929.9)の最終号まで版画や詩などを発表する。個展・団体展などへの出品は好まず、『さとぼろ』以外で発表することはなかったが、唯一、札幌詩学協会が主催した「第1回版画展覧会」(札幌商業会議所 1925.10.25～27)に木版画《静物》3点、《風景》2点、《農学講堂》《アイロニー》《デイプレッション》の8点を出品。当時小樽新聞社の記者であった唯是日出彦は「版画展印象」で《デイプレッション》について「稚拙さをねらって無理がない」と記している。1930年当時の連絡先は札幌市南十一條西一丁目遊園地14。1983(昭和58)年逝去。【文献】今田敬一『北海道美術史』(北海道立美術館1970)／『原色浮世絵大百科事典』10(大修館書店1981)／『創作版画誌の系譜』／『さとぼろ』発見展図録(北海道文学館2016)(加治)

服部正治(はっとり・まさはる)

愛知県半田の教師仲間は1928年7月に開催された版画講習会(亀崎第一尋常小学校 講師:平塚運一)を機に版画団体・版刀会を立ち上げ版画誌『運』を創刊する。その第5号(1931)に風景を描いた木版画(題名不詳)を発表。現在『運』は5～7・10号(1931～1935)の4冊を確認している。【文献】『創作版画誌の系譜』(加治)

初山 滋(はつやま・しげる) 1897～1973

1897(明治30)年7月10日東京市浅草区田原町に生まれる。本名繁蔵。8歳の時、狩野派の絵師荒木探令に数か

月の間学ぶ。9歳から着物の模様画を扱う工房に丁稚奉公。この時期藍の美しさを知り、尾形光琳に影響されたという。13歳で工房を辞め、画家を目ざして井川洗屋に入門。1915年巽画会で銀賞受賞。翌年『少年倶楽部』に口絵が、『少女画報』にコマ絵が採用される。1919年文光堂から童話雑誌『おとぎの世界』が創刊されるにあたり同社の嘱託社員となり、表紙や口絵、挿絵を手がける。1927年から『コドモノクニ』の仕事を始め、同年武井武雄らとともに「日本童画家協会」を結成。流麗な線とみずみずしい色彩による幻想的な作風が人気を呼び、武井と並び称される童画家となった。木版画は料治熊太に勧められて始め、1931年7月の『白と黒』第16号に《風景》を発表。以後同誌の第17・19・20号、再刊『白と黒』の第2・4号、第三次『白と黒』の第1年1号・1年3号、『版芸術』の第1・2・5・9・16号に作品を寄せる。1934年には武井・料治とともに版画による賀状交換会「版交会」(のち「桜の会」)を発足。戦中は児童画の仕事が減り版画に熱中するようになり、1940年に自刻自摺木版による初の私家版、梶本喜久代の詩集『月の世』を出版。1943年木版連作《くらべ十二姿》を制作。同年日本版画奉公会に参加。1944年銀座田屋画廊にて「初山滋版画頒布会展」を開催。日本版画協会への出品はなかったが、推薦されて同年会員となっている。1945年私家版第二作『飛白のズボン』完成。戦後は童画とともに木版画の一枚摺をコンスタントに手がけ、日本版画協会への出品を続けた。『一木集』第Ⅱ・Ⅳ・Ⅵ輯にも参加。1960年にスイス・ルガノ国際版画展への出品があり、1967年には自刻自摺の木版を用いた絵本『もず』で国際アンデルセン賞国内賞を受けている。版画の題材や造形は童画に通じるが、多くは「彫り込み」が用いられ、摺数はほとんどが10部に満たない。また少年時代の工房での経験から顔料に格別のこだわりを持ち、とりわけ本藍を使うほどの凝りようで追求した藍色の美しさで知られた、特異な版画家であった。1973(昭和48)年2月12日東京都で逝去。【文献】『日本版画協会会報』37(1944.3)／『日本美術年鑑』昭和49・50年版(東京文化財研究所1976)／『初山滋版画集』(講談社1976)／関野準一郎『わが版画家たち』(講談社1982)／竹迫祐子『初山滋 永遠のモダニスト』(河出書房新社2007)／『創作版画誌の系譜』／オリヴァー・スタットラー著・猿渡紀代子監修『よみがえった芸術—日本の現代版画』(玲風書房2009)(西山)

花崎悌吉(はなざき・ていきち)

川上澄生が英語教師をしていた栃木県立宇都宮中学校(現・県立宇都宮高等学校)に在学中、長谷川勝三郎ら同校生徒が発行した版画誌『刀』(1928～1932 13冊)の創刊号から参加。その第1輯(1928)に《風景》、第2輯(1928)に《靴》、第3輯(1928)に《風景》、第4輯(1929)に《冬ノ日》、第5輯(1929)に《石膏頭像》、第6輯(1929)に《果物》を発表する。1930年に同校を卒業。【文献】『版画をつづる夢 宇都宮に刻まれた創作版画運動の軌跡』展図録(宇都宮美術館2000)／『創作版画誌の系譜』(加治)

花田青児(はなだ・せいじ)

佐藤米太郎ら青森中学校の3人が青森最初の版画誌『緑樹夢』(1930～1931)を発行。1931年6月、これに刺激された若者たちは、佐藤らと「青森創作版画研究会・夢人社」を結成し、版画誌『彫刻刀』(1931～1932 17冊)を創刊するが、花田も創刊から参加。第1号(1931.6)に《溪

流》、第2号(1931)に《風景》《陸奥青森十景》、第3号(1931)に《カモメ島》、第4号(1931)に《樹間》、第5号(1931)に《冬》、第6号(1932)に《年賀状》と《蔵書票》3点、第7号(1932)に《風景》を発表。その後の消息は不明。【文献】『緑の樹の下の夢—青森県創作版画家たちの青春展』図録(青森県立郷土館 2001)／『創作版画誌の系譜』(加治)

浜口陽三 (はまぐち・ようぞう) 1909～2000

1909(明治42)年4月5日和歌山県有田郡広村に生まれる。生家は千葉県銚子で代々醤油醸造業を営む。1915年家族と銚子に移る。1928年東京の京華中学校を卒業し、東京美術学校彫刻科塑造部に入學。1929年の第4回国画会展に彫刻《首》、翌年の第5回展にも油彩画《榛名湖》が入選。1930年東京美術学校を中退し、渡仏。最初は研究所で油彩画を学んでいたこともあったが、浜口が「留学というより、むしろ日本脱出だった」(『パリと私』『日本の名画50 浜口陽三』講談社 1973)というように、パリの生活を楽しみ、南仏のヴィルフランシュ、スペイン領マヨルカ島、西インド諸島、ニューヨークなどに長期滞在するなど、遊学とも呼ぶべきものであった。それでも、1933年のサロン・ドートンヌ、1934年のサロン・ド・テュルリーなど油彩画が入選。1936年にはパリから新時代洋画展にも出品し、1937年の自由美術家協会の結成に参加した。またこの頃、銅版画に興味を覚え、翌年にかけて《猫》(ドライポイント)など数点を制作。1938年にパリで開いた最初の個展(アンドレ・シュレーレル画廊)に近作の水彩画などと共に発表している。1939年9月の第二次世界大戦勃発のため、1940年に帰国。同年の紀元二千六百年記念美術創作秋季展などに油彩画を出品したが、翌年政府が派遣した「仏印資源調査団」の通訳としてハノイに同行。同地に滞在中、太平洋戦争が始まったため陸軍の通訳となり、ベトナム・ラオスに行くが、マラリアに罹り、ベトナムの病院で終戦を迎えた。1946年か、帰国。マラリアの養生をしながら、1947年から美術団体連合展、自由美術展へ油彩画・パステル画・デッサンなどを出品するも次第に油彩画への興味を失い、1950年頃から本格的に銅版画を始めるが、その技法はドライポイント・メゾチントなど腐蝕法によらないものであった。1951年に銅版画による最初の個展(銀座・フォルム画廊)を開催。1953年には日本銅版画協会の会員となり、関野準一郎・駒井哲郎らと「日本銅版画家協会」を結成した。同年再渡仏。1954年の第1回現代日本美術展で佳作賞を受賞。1955年には黒・青・赤・黄色の4版を重ねる独自のカラー・メゾチントも始め、1957年の第1回東京国際版画ビエンナーレ展で国立近代美術館賞、第4回サンパウロ・ビエンナーレで版画大賞を受賞。1958年には第9回毎日美術特別賞を受賞した。その後も1960年の第30回ベネチア・ビエンナーレに出品。また、1961年の第4回リュブリアナ国際版画ビエンナーレ展で大賞、1966年の第1回クラコウ国際版画ビエンナーレでグランプリ同等賞、1982年北カリフォルニア版画大賞でグランプリを受賞するなど、20世紀を代表する版画家の一人として国際的に活躍した。1981年パリからサンフランシスコへ移住。同年和歌山県文化賞を受賞。1986年にはベルギー王立アカデミー美術部門名誉会員に推挙された。1996年帰国し、東京都に住む。1998年には浜口作品を常設展示する「ミューゼ浜口陽三・コレクション」(日本橋牡蠣殻町)が開館。2000(平成12)年12月25日東京都港区で逝去。夫人は銅版画家南桂子(1911～2004)。【文献】『浜口陽

三全版画作品集』(中央公論美術出版 2000)／『パリと私—浜口陽三著述集』(玲風書房 2002)／『20世紀版画の巨匠 浜口陽三展』図録(国立国際美術館 2002)(三木)

濱崎金一 (はまざき・きんいち)

1922(大正11)年に神戸弦月画会主催の創作版画展(2.23～26 神戸・三宮三〇九番館)に木版画《女 其一》《女其二》を出品。出品時は神戸に住む。【文献】『(神戸弦月画会主催)創作版画展覧会目録』(1922)(三木)

浜島準平 (はしま・じゅんぺい)

愛知県半田の教師仲間は1928年7月に開催された版画講習会(亀崎第一尋常小学校 講師:平塚運一)を機に版画団体・版刀会を立ち上げ版画誌『運』を創刊する。同誌第5号(1931)に花を描いた木版画(題名不詳)2点を、第6号(1931?)にはグラジオラスを描いた木版画(題名不詳)を発表。現在『運』は5～7・10号(1931～1935)の4冊を確認している。【文献】『創作版画誌の系譜』(加治)

濱田三郎 (はまだ・さぶろう) 1892～1973

1892(明治25)年12月北海道函館に生まれる。生後間なく東京へ移住。1913年東京美術学校彫刻科彫塑部に入學。同級生に「構造社」で共に活動する日名子実三や寺畑助之丞がいた。その一方、小学校での同級生であった西洋画科の鈴木保徳とエッチング制作を行なっている。その頃のことを鈴木は「こんな事でも当時我々の手に届く処には、一つの銅板も一台の印刷機もなかつたので実に大した発見で、当時美校洋画部のエッチングに熱烈な憧憬を持つて居た学生及びそれ以外の人々迄も風靡してしまひました。構造社の濱田三郎君や二部会の中村研一君などで、真物の試みを始めたのは此の後の時期に属するわけです」(『憧れのエッチング』『エッチング』45 1936.7)と述べている。卒業後は、山田・林良三の三人で「ヤマト社」を結成し、資生堂で小品展を開催。1926年の第7回帝展に《母》で入選。翌1927年2月「構造社」に創立会員として参加し、以後、構造社を中心に彫刻発表を行なひ、戦後は連立展や1958年の第1回日展から亡くなるまで日展に出品する。彫塑の他にエッチングに関心を寄せ、西田武雄の研究所からプレス機を購入している。加えて『エッチング』第43号(1936.5)に「三文エッチング」、第54号(1937.4)の「外川通信」では「月並の名勝エハガキは最早倦き倦きしました。其土地の小学生などのエッチング一葉が如何に興味深い感激を与えることでせう」と述べ、第103号(1941.8)に「緑庭漫筆」などを寄稿している。そのほかエッチング《裸婦》(1910年代)、木版《風景》(1920年代)を制作している。1973(昭和48)年11月10日東京で逝去。【文献】『構造社 昭和初期彫刻の鬼才たち』展図録(宇都宮美術館 2005)／『エッチング』43・54・103(森)

浜田庄司 (はまだ・しょうじ) 1894～1978

1894(明治27)年12月9日神奈川県橘樹郡高津村(現・川崎市溝口)に生まれる。本名象二。8歳の頃から親戚であった橋本邦三のアトリエに入りし、石井柏亭・鶴三兄弟や倉田白羊、山本鼎と親しむ。1908年東京府立第一中学校に進む。一中時代に『秀才文壇』や『中学世界』『層雲』といった雑誌にコマ絵を応募し、多数採用される。1910年の『ホトトギス』第14巻1号にも挿画《解を下り

て《夜寒》を寄せている。一中時代にはまた、近所に住んでいた木村莊八と親しみ、木村の蔵書からルノワールの言葉を知り工芸に進む意志を固めたという。1913年東京高等工業学校窯業科に進み、板谷波山に師事。そのかわら白馬会洋画研究所にも学び、1914年の光風会第3回展に水彩画《風景》《庭の裏》が入選している。東京高等工業学校では文芸部に入り、同人誌『淺草文庫』の第33～37号（1914～1916）に詩や短歌とともに木版画による斬新な表紙や扉絵・挿絵・裏絵を寄せた。1916年東京高等工業学校を卒業して京都陶磁器試験場に入り、以後陶芸に専心。益子を拠点に作陶を続けて後年人間国宝となり、また大正末年以来民藝運動を推進したことで広く知られる。木版画の制作は大正初期の東の間であったが、国画会時代の1936年、第11回展に《大和しめし》を出品した棟方志功を見いだした功績も大きい。1978（昭和53）年1月5日栃木県芳賀郡益子町で逝去。【文献】奥野健男「『蔵前』時代の浜田庄司の作品とその周辺」『多摩美術大学研究紀要』3（1987.8）／寺口淳治・井上芳子「大正初期の雑誌における版表現一『月映』誕生の背景を探って一」『大正期美術展覧会の研究』（東京文化財研究所 2005）／『人間国宝 濱田庄司展』図録（川崎市市民ミュージアム 2008）（西山）

浜田知明（はまだ・ちめい） 1917～

1917（大正6）年12月23日熊本県上益城郡高木村（現・熊本市御船町高木）に生まれる。旧姓は高田、名の読みは「ともあき」。1934年御船中学校第4学年修了、東京美術学校油画科に現役で合格し予科に入学。後油画科本科に進学し、藤島武二教室に学ぶ。1936年美校3年生7名で小グループ「デ・ザミ」を結成する。グループの命名は中山魏。1937年臨時版画教室で助手の佐々木孔に銅版画制作の手ほどきを受ける。銅版画《試作》が西田武雄主宰の版画雑誌『エッチング』第57号に掲載される。またこの年デ・ザミ第1回展と第2回展を銀座・紀伊国屋画廊で開催し、第2回展に《或る男の像》《試作》を出品する。1938年美校の臨時版画教室でエッチング《聖馬》を制作。デ・ザミ第3回展を開催する。1939年3月東京美術学校を卒業。5月「磁座」と「デ・ザミ」の同人連名により「新浪漫派結成の提唱」がなされ、これを受けて6月に福沢一郎と瀧口修造を顧問として、「レ・リラ」「成層」「貌」「汎」「虹人」「磁座」「デ・ザミ」の同人らによって「新浪漫派美術協会」が結成され、創立同人に名を連ねる。12月熊本歩兵第13連隊補充隊に入隊、翌年2月中国大陸に派遣され、歩兵砲隊に所属して華北山西省で作戦警備に従事した。派遣と同じ2月に銀座・三越で新浪漫派美術協会第1回展が開催され《聖馬》を出品する。戦地では、版木と彫刻刀を慰問袋に入れて送ってもらい葉書大の木版画を制作した。また中国軍陣地の写景図を描く一方で、事務用紙に鉛筆で城壁や山・トーチカ、戦友の顔や軍馬などを描いた。1943年兵役満期のため除隊。上京し、立正高等女学校で講師を務める。1944年美術文化協会第5回展に油彩画《驢馬》を出品。その後帰郷し結婚、浜田姓となる。7月応召され独立混成第18連隊に入隊、新島に派遣される。1945年終戦により除隊復員し、熊本の自宅に落ち着く。1946年熊本県立商業学校に勤務、10月に木版画で挿絵を描いた『イソップものがたり』が熊本市南書店から出版される。1948年単身上京し、福沢一郎夫人の紹介で成城大学付属小学校に勤める。美術文化協会第8回展に出品し、会員に推挙される。1949年美術

文化協会第9回展に出品。その後自由美術家協会に移り、第13回展に出品、会員となる（1959年退会）。横浜市立市場中学校の専任講師となる（1957年退職）。1950年駒井哲郎・関野準一郎などから助言を受けて銅版画の研究を始める。《初年兵哀歌（芋虫の兵隊）》《聖馬》は駒井のアトリエで制作した。また、アクアチントを初めて使って《Marikoに》を制作。以後1957年頃までは「初年兵哀歌」シリーズを中心に戦争の惨劇と軍隊の不条理をテーマに銅版画を制作、1957年に郷里の熊本市に定住する頃からは世界の動きと人間を見つめ、社会・人間諷刺をテーマに銅版画を制作した。1983年からは彫刻作品の制作を始める。2000年を最後に銅版画の制作から離れ、彫刻作品や戦争体験をもとにした素描を制作。1956年ルガノでの第4回白と黒国際版画展に出品した《初年兵哀歌（歩哨）》が次賞受賞、同年第2回現代日本美術展で《よみがえる亡霊》《副校長D氏像》が佳作受賞。1960年第4回現代日本美術展に招待出品した《群盲》が優秀賞受賞、1962年第5回現代日本美術展に出品の《狂った男》が福島賞を受賞した。熊本県立美術館で4回（1979・1994・2001・2015）、神奈川県立近代美術館で3回（1980・2000・2010）の展覧会が開催されたほか、1996年に富山県立近代美術館など4館巡回の全容展が開催された。【文献】『浜田知明作品集 コンプリート1993』（求龍堂 1993）／『浜田知明展 版画と彫刻による人間の探求 図録』（熊本県立美術館 2001）／『浜田知明の世界展図録』（神奈川県立近代美術館 2010）／『戦後70年記念 浜田知明のすべて展図録』（熊本県立美術館 2015）（滝沢）

浜田如洗（はまだ・じょせん） 1875～没年不詳

東京下谷に生れる。本名は恵作。父親から絵の手ほどきを受け、1898（明治31）年に富岡永洗に師事。師の推薦で『（京都）日の出新聞』に入社し、挿絵を担当。その後、東京に戻り『日本新聞』で活動。山田奈々子著『木版口絵総覧』によれば、木版彩色口絵としては1901年に江見水蔭著『金剛石』（嵩山堂）、1903年に武田仰天子著『丸腰銀次』と『築屋銀杏』（共に嵩山堂）と関西からの出版に口絵版下を描いている。伝統木版画による多色摺版画では、1924年の『新浮世絵美人合』では『十二月 雪晴れ』を、1926年の『大正震災画集』（井川洗厓・片山春帆・八幡白帆・高島雲峯・近藤紫雲・柴田耕洋・野口紅涯等、絵巻物研究会）では《大犠牲》（八）、《馬匹の惨禍 吾妻橋附近》（九）、《橋梁の炎焼 本所方面》（十二）を担当。昭和期にも挿絵で活躍。【文献】山田奈々子『増補改訂 木版口絵総覧』（文生書院 2016）（岩切）

濱中林太郎（はまなか・りんたろう）

群馬県桐生の出身か。1921（大正10）年7月の『みづゑ』第197号に短歌「木版を彫る」9首（「ひつそりとしみみにそそぐ夜の雨われはこもりてきを刻みつつ」など）を発表。翌1922年2月に神戸弦月画会主催の創作版画展（23～26 神戸・三宮三〇九番館）に木版画《悩める森》を出品。5月頃には三俣右一・松浦喜久二らと版画誌『蒼空』第1号（蒼空版画社 桐生市新宿 濱中林太郎方）を創刊。同誌は未見であるが、同人の木版画10点が収録されていたという（『新刊紹介』『みづゑ』208）。さらに、1923年2月の『みづゑ』第216号に《木版年賀はがき》の図版、3月の『詩と版画』第2輯（旭正秀編）に木版画《市街》の図版が掲載されている。【文献】『（神戸弦月画会主催）創作版画展覧会目録』（1922）／『みづゑ』197・

濱野 脩 (はまの・おさむ)

1929(昭和4)年の第1回京都創作版画会展(2.1~5京都・大丸)に木版画《無題》を出品。その後、1931年の第18回二科展に油彩画《樹間風景》が初入選。続く第19回展(1932)、第20回展(1933)にも油彩画が入選。また、1934年の大札記念京都美術館美術展、翌1935年の第1回京都市展に油彩画を出品した。【文献】『創作版画・古版画展覧会目録〔京都創作版画会第一回展覧会〕』(京都創作版画会 1929) / 岡田毅「京都における創作版画運動の展開」『〔京都府立総合〕資料館紀要』12(1984.3) / 『昭和期美術展覧会出品目録 戦前篇』(東京文化財研究所 2006)(三木)

羽矢利馬 (はや・としま)

1931年8月3日から7日、大分県師範学校の図画教師武藤完一は講師に平塚運一を招いて、版画教育講習会(大分県師範学校第3回夏期図画実技講習会)を開催した。これを機に武藤は版画誌『彫りと摺り』(1931~1933 8冊)を創刊。羽矢は大分県西国東郡からこの講習会に参加し、同誌第1号(1931.9)に《宮島》、第2号(1931.11)に《スリッパ》、第3号(1932.1)賀状号に《猿〔賀状〕》、第4号(1932.6)に《別府棧橋》、第6号(1932.12)に《高崎山》、第7号(1933.3)には表紙《橋下から河口》を発表。一方、西国東郡の羽矢をはじめ中津市などからこの講習会に参加した同宿の者10人は親睦と版画技術向上のために、版画同人誌『空巢』(1931~1932 4冊)を発行する。『空巢』という奇妙なタイトルは、講習会のために泊まった部屋が学生のための下宿であり、夏休みで空き巣だったことからの命名である。その第1号(1931)に《姫島港》、第2号(1931.12)に《車中の女》、第3号(1932.9)に《別府風景》を発表。その後、1933年8月には平塚の2回目となる版画講習会(大分師範学校第5回夏期図画実技講習会)が開催され、武藤はこれを機に創作版画を九州全土に広める意図で『彫りと摺り』を『九州版画』(1933~1941 24冊)と改題した。羽矢は同誌第8号(1935.10)講習会記念号に《風景》を発表。この号は1935年8月1日から5日に開催された講習会(大分県師範学校第7回夏期図画実技講習会 講師:平塚運一、畦地梅太郎)の記念号でもあるため、羽矢も講習会に参加したものと考えられる。その前年に大分県師範学校第6回夏期図画実技講習会として行われたエッチングの講習会(講師:西田武雄 1934.8.1~5 参加者32名)にも参加し、銅版画の技術を学んでいる(『エッチング』22 1934.8)。当時、大分県西国東郡白野校に勤務。『九州版画』第24号(1941.12)の会員名簿には名前が記載されているものの、作品の発表はない。【文献】『創作版画講習会其他版画展等』『郷土図画』1-5(1931.10) / 池田隆代「大分県における創作版画誌」(『大分県立芸術会館研究紀要』1 2002.9) / 武藤隼人『版画家・武藤完一資料集(戦前篇I) - 作家年譜を中心にして -』(武藤隼人 2010) / 『創作版画誌の系譜』(加治)

早川都雨 (はやかわ・とう)

東京の料治熊太が発行した版画誌『版芸術』第9号(1932.12)「全日本版画家年賀状百人集」に木版画の賀状を発表。「全日本版画家年賀状百人集」とあるので、版画家として活動していたと考えられるが、他の作品は確認

できず。【文献】『創作版画誌の系譜』(加治)

早川良雄 (はやかわ・よしお)

1924(大正13)年に「京城俳句会」に参加。俳号は「草仙」(そうせん)。1929年12月に京城(現・ソウル)で「朝鮮創作版画会」を設立し、多田毅三・佐藤貞一とともに中心的な役割を担う。翌1930年1月には機関誌でもある版画誌『すり絵』を刊行。創刊号に木版画《煙突掃除夫》を発表し、「編輯室たより」を執筆。2月の第2号にも表紙絵と《四鼓舞》を発表し、「編輯所便」を執筆。3月には「朝鮮創作版画会第1回試作展」(京城・三越)を開催。翌1931年3月にも第2回展(京城・三越)を開催した。一方、朝鮮総督府主催の朝鮮美術展へは第3回展(1924)から出品し、入選。その後も第6・7・9~11・13回展(1927・1928・1930~1932・1934)に入選したが、第9回展の《少女》、第10回展の《朝鮮婦人像》、第11回展の《火の見える風景》、第13回展の《南大門付近》は版画作品であった。早川は朝鮮において創作活動を始め、展覧会・講演会などに参加し、創作版画の普及活動に尽力したが、1934年以降の消息は不明。【文献】辻千春「植民地期における創作版画の展開(1)・(2)・(3)」『名古屋大学博物館報告』(2015・2016) / 『創作版画誌の系譜』(河野)

林 協 (はやし・きょう)

長野県北佐久郡小諸に生まれる。長野県師範学校一部4年に在学中、同校生徒による版画誌『樹水』(1938~1940? 4冊)の第1号(1938)に《炉辺》を、5年に進級後、第2号(1940)皇紀2600年版に《帰省》を発表。1940年同校を卒業し、1950年当時は東京都中央区立京橋昭和小学校(現・京橋築地小学校)に勤務。【文献】『樹水』1・2 / 『卒業生名簿 昭和25年』(信州大学教育学部本校 1950)(加治)

林幸四郎 (はやし・こうしろう) 1910~1990

1910(明治43)年長野県北佐久郡望月町春日に生まれる。1930年に長野県師範学校本科を、1931年に専攻科(図工)を卒業後、松代尋常小学校を経て、1933年に東京の麻布高等小学校に勤務。本郷洋画研究所でデッサンと油絵を学び、1934年に構造社展、1935年に光風会展に出品する。1936年には文部省検定に合格し、師範学校、中学校、高等女学校教員免許を取得。1937年兵庫県淡路高等女学校に勤務する。1940年には東京高等師範学校研究科(図画)を卒業。以後、新潟や中国天津の中学校、朝鮮大邱の師範学校などに勤務する。戦後は長野県上田に帰り、高等学校や大学で教えながら、公募展に応募する。日本水彩画会会員。春陽会会友。日本美術家連盟会員。信州美術会評議員。1990(平成2)年に逝去。版画は、1934年東京府麻布高等小学校に勤務当時、西田武雄主宰の日本エッチング研究所機関誌『エッチング』第18号(1934.4)に掘割のある風景を描いた銅版画が掲載される。西田はエッチング教育普及のため、全国の小・中学校を回り、教師や生徒のための版画講習会を行なっていて、1934年2月20日からの4日間、エッチング研究所に東京の麻布区に勤務する図画手工主任11名を集め、エッチング講習会(『エッチング』17 1934.3)を行った。林もその講習会に参加しており、掲載作品はその講習会での作品と考えられる。また、『エッチング』第27号(1935.1)の西田が書いた「賀状」の中で自画像と思われる銅版画の賀状が紹介されている。1991年に『林幸四郎作品集』が林清弘に

よって出版された。【文献】『林幸四郎作品集』（林清弘 1991）／『エッチング』17・18（加治）

林 重義（はやし・しげよし） 1896～1944

1896（明治29）年4月29日兵庫県神戸市に生まれる。少年期を大阪に過ごし、1910年大阪府立北野中学校に学ぶも、1913年中退。1914年京都市立絵画専門学校別科予科に入学。級友に旭谷左右がいた。1916年退学し、関西美術院に学ぶ。1917年父の郷里大分に帰る。1920年京都に出て、鹿子木孟郎に学び、同門の小林和作と交友。1922年小林と上京。1923年の第10回二科展に初入選。以後、毎回出品し、第13回展（1926）で二科賞を受賞。また、1925年の第7回中央美術展で中央美術賞を受け、会員に推挙され、翌1926年の第13回日本水彩画会展にも出品し、会員となった。1928年から1930年にかけて渡欧。フランスから1929年の第16回二科展に出品し、会友になる。帰国後は兵庫県武庫郡住吉村唐松に住む。1930年の第17回二科展に滞欧作20点を特陳するも、同志とともに退会し、「独立美術協会」を結成。1937年の第7回展まで毎回出品するも、同会の超現実主義的傾向の流行に反発し、純写実主義を唱えて退会。翌1938年には新文展の無鑑査となり、第2・3回展（1938・1939）、紀元2600年奉祝展（1940）、第5・6回展（1942・1943）に出品。奉祝展と第6回展では審査員を務めた。またその間、1942年には国画会同人となり、第18回展（1943）に出品している。

版画は、1917年頃に木版画を手掛け、旭谷左右との版画集『重義 左右版画集』（第弍集 1917.6.20 私家版）に《晨》《アベルを殺したカイン》《扉》を発表。その後中断があり、1933年よりリトグラフの制作を始め、1934年に大塚銀次郎が経営する神戸画廊（10.8～10）でデッサンとともに発表。出品作品は不明だが、現在知られているリトグラフ作品としては、フランス時代に好んで描いていた《曲馬》《道化》《ダンサー》《レビューの女》《サーカスの人々》《ギターを弾くピエロ》《ボードビリアン》《足長おじさん》《カーニュにて》《ダンス》《メトロの入り口》《パリの街》《花売り》などのほか、兵庫県の香住海岸に取材した《漁婦》《漁港》などがあり、1935年の『みづゑ』第364号（6月号）には《ダンサー》《漁婦》の図版が掲載されている。また、1940年頃から品川清臣が経営する「西宮書院」（1934創業 兵庫県・西宮）を版元とし、油彩画・グアッシュを原画に求めた伝統技法による木版画《白馬》《朝市》《トランプをする人々》《ラ・フラテリニ》などを制作。1941年に「和田三造・大野麦風・堂本印象・林重義四人版画展」（1.17～21 銀座・資生堂 主催：西宮書院）、1942年には展覧会名を「国粋版画第二回展」（1.29～31 銀座・資生堂 出品者：和田三造・大野麦風・堂本印象・林重義 主催：西宮書院）と改め開催している。1944（昭和19）年3月15日兵庫県武庫郡住吉村で逝去。同年の第19回国画会展に遺作の油彩画3点が並んだ。【文献】『林重義 没後50年展』図録（神戸市立小磯記念美術館 1994）／『木版画の美 版元—西宮書院と画家』展図録（姫路市立美術館 2001）／『大正期美術展覧会出品目録』（東京文化財研究所 2002）／『昭和期美術展覧会出品目録 戦前篇』（東京文化財研究所 2006）（三木）

林 唯一（はやし・ただいち） 1895～1972

大正末年から昭和にかけての挿絵画家。少年少女向け雑誌にはじまり、『婦人世界』『キング』などの現代小説

ものの挿絵で活躍し人気を得る。1895（明治28）年1月27日香川県香川郡太田村に生れる。関西商工学校を卒業し、松原三五郎の天彩画塾で洋画を学ぶ。一時、洋画家徳永仁臣に師事、上京して川端画学校に入り洋画を学んだ。挿絵の世界に入り、1940年から1942年に中国大陸の中・南部方面に従軍。戦時中は日本少国民文化協会絵画部幹事、日本挿絵家協会委員長となる。版画は、現在判明している作品で、1930年代中頃とされる高見澤版『昭和錦絵美人十粧』（木村莊八・田村孝之介・田中比左良・小村雪岱・小磯良平・中村研一・鴨下晃湖・小早川清・中川一政等と）の内、大判多色摺美人版画《外出》を担当制作している。戦中戦後にわたり、田園の耕作労働の女性たち、郷土民俗芸能を取材して、全国各地へ訪れ、スケッチ・水彩画を制作しライフワークとした。1972（昭和47）年12月27日逝去。【文献】『日本美術年鑑』昭和48年版（東京国立文化財研究所 1974）（岩切）

林 百三（はやし・ひやくぞう）

長野県下伊那郡龍江に生まれる。長野県師範学校二部1年に在学中、同校生徒による版画誌『樹水』（1938～1940? 4冊）の第2号（1940）皇紀2600年版に《無題》を発表。1941年同校を卒業。1950年当時は下伊那郡神稲小学校に勤務。『卒業生名簿 昭和25年』には村澤百三として旧姓で掲載されている。【文献】『樹水』2／『卒業生名簿 昭和25年』（信州大学教育学部本校 1950）（加治）

林 兵治（はやし・へいじ）

東京の吉祥寺近辺在住の文学者や画家などの芸術関係者が集まり「朴の会」を起し、版画集『むさしの風景』を発行する。其の一（1938.11）に《井之頭の月》を発表。其の二は発行されたが、内容は確認できず。【文献】『むさしの風景』1（朴の会）（加治）

林 みのる（はやし・みのる）

東京の料治熊太が発行した版画誌『版芸術』第9号（1932.12）「全日本版画家年賀状百人集」と第21号（1933.12）「創作版画年賀状傑作集」に同じ図柄の年賀状が掲載されている。『全日本版画家年賀状百人集』とあるので、版画家として活動していたと考えられるが、他の作品は確認できず。【文献】『創作版画誌の系譜』（加治）

林 明善（はやし・めいぜん） 1899～1938

1899（明治32）年9月18日愛知県名古屋市に生まれる。智山大学〔智山勸学院か〕を卒業。1925年上京し、川端画学校洋画科、同舟舎洋画研究所を経て、洋画家片多徳郎に師事。1926・27年の第3・4回白日会展に油彩画が入選したのち、1927年の第8回帝展に油彩画《盛果之図》が初入選。以後、第9・11・13回展（1928・1930・1932）、昭和十一年文展鑑査展（1936）と出品を重ねた。またその間、1928年の第7回国画会展、1930年の第2回聖徳太子奉賛美術展などに出品した他、1929年に結成された第一美術協会へは、同年の第1回展から出品したと思われ、1932年の第4回展で無鑑査に推薦され、その後（翌年か）会員になっている。版画は、1932年の12月の『版芸術』第9号「全日本版画家年賀状百人集」に《木版年賀状》を発表。1936年5月の第5回日本版画協会展に木版画《不動明王》を出品した。1930年頃の住所は、「名古屋市中渡町1ノ18 大御堂」。1938（昭和13）年3月28日名古屋市中で逝去。【文献】「物故作家及美術関係者」

『日本美術年鑑』昭和14年版(美術研究所 1940) / 『昭和期美術展覧会出品目録 戦前篇』(東京文化財研究所 2006) / 『創作版画誌の系譜』(三木)

林田信幸 (はやしだ・のぶゆき)

1936年に設立された「内牧エッチング協会」(熊本県阿蘇郡内牧町 久富季人方)の会員で、同年8月20・21日に久富季人宅で開催された第1回銅版研究会に参加。因みに同協会会員は岡崎了孝・久富季人・永田珠一と林田の4名。【文献】『エッチング』47(樋口)

原 岩男 (はら・いわお)

1936年発足の名古屋エッチング協会(長船一雄方)の会員で、当時は名古屋市在住と思われるが、作品は未見。【文献】『エッチング』47(1936.9)(樋口)

原 勝四郎 (はら・かつしろう) 1886～1964

1886(明治19)年4月5日和歌山県西牟婁郡田辺町に生まれる。1904年和歌山県立田辺中学校を卒業。1905年上京。1906年東京美術学校西洋画科予備科に入学するも中退し、帰郷か。1907年第11回白馬会展に油彩画《海辺の夕暮》が入選。1908年西牟婁郡田辺尋常高等小学校的の代用教員となる。1909年教員を辞し、再上京。1910年東京美術学校西洋画科予備科に再入学するも中退。同年東京音楽学校選科に入学。ヴァイオリンを学ぶ一方で、洋画家山下新太郎に兄事。1912年東京音楽学校を退学。1914年第3回光風会展に水彩《曙》と油彩画《習作》が入選。1915年熊谷守一と交友。1916年帰郷し、翌1917年渡仏。働きながらモンパルナスの美術学校に学んでいたこともあったが、生活に窮し、フランス各地、アルジェリアを放浪。1921年帰国し、郷里の田辺、後に隣町の白浜に住む。同年の第8回二科展に滞欧作《風景》2点が入選するも翌1922年は落選。以後、しばらく公募展から離れたが、この時期に版画を制作し、1925年12月に野口利太郎と「版画展覧会」(中旬 田辺・会場不明 主催:田辺詩話会)を開催。展覧会の詳細は不明であるが、二人で自刻木版画約30点の出品であった。また、1923年に田辺在住の東京美術学校出身者と洋画研究会「朱樂会」を結成。1927年には建島大夢を中心に和歌山県ゆかりの作家によって結成された「南紀美術会」の会員となり、1928年に田辺周辺の作家らによる「無名社」にも参加した。その後、1929年の第16回二科展に再び出品するようになり、以後1943年の第30回展まで毎回出品。その間、1940年の第27回展出品の《頭像》で岡田賞を受賞。二科特待となり、1941年には二科会友になった。また、1934年の大礼記念京都美術館美術展、1940年の紀元2600年奉祝美術展などにも出品している。戦後は鍋井克之の勧めで二紀会同人になり、1948年の第2回展から1960年の第14回展まで毎回出品。1953年同人努力賞、第13回展(1959)で同人優秀賞を受賞した。1964(昭和39)年4月14日田辺市で逝去。【文献】『紀伊民報』1925.12.4付/三谷涉「帰国後の原勝四郎についてのノート」『和歌山県立近代美術館ニュース』60(2009.3) / 『原勝四郎展』図録(田辺市立美術館 2011) / 『大正期美術展覧会出品目録』(東京文化財研究所 2002) / 『昭和期美術展覧会出品目録 戦前篇』(東京文化財研究所 2006)(三木)

原 弘 (はら・ひろむ) 1903～1986

1903(明治36)年6月22日長野県飯田市に生まれる。1921年東京府立工芸学校製版印刷科を卒業。卒業制作と

して石版画を制作。同科の助手となり印刷図案と石版印刷の授業を担当する。1924年築地小劇場の表現主義的な舞台に興味をもち、定期公演を毎回観劇、また村山知義の活動に触発される。1925年三科第2回展(公募展)に石版画によるコラージュ《アロイス・ゼネフエルダー氏への感激》と水彩画《薔薇を愛する少女に与ふるhとtを主題とせるモノグラム》を出品。1926年横井弘三主催の「理想大展覧会」に油彩画1点のほか石版画《劇場の為にものさしたるポスター》を出品。この年『ひろ・はら石版図案集』を自費刊行した(1927年に同図案集Nr. IIを自費刊行)。1928年グループ「造型」が改組された「造型美術家協会」に新同人として参加、常任中央委員に選出されてプロレタリア美術運動に突き進む。同協会第1回展に《無産者新聞を読め》(撤回となる)などのポスター3点と《石版印刷物(表紙)》を出品。またこの年開催の第1回プロレタリア美術大展覧会に「早川久夫」の名で《鎖を切れ!プロレタリア映画全九巻製作》などポスター3点を出品した。1929年日本プロレタリア美術家同盟(PP)の結成に参加、中央委員に選手される。第2回プロレタリア美術大展覧会に前回と同じ名でポスターを出品。1930年7月開催のプロレタリア美術研究所第2回夏期講習に参加、以後プロレタリア美術運動と距離を置く。1931年東京府立工芸学校助教諭に就任する。1932年「東京印刷美術家集団」を結成し代表を務める(1937年頃活動を休止)。また、同人組織「東京工房」を設立し、商店建築の設計やその内装を手掛ける。1933年写真雑誌『光画』に「絵一写真、文字一活字、そしてtypofoto」を連載し、野島康三・木村伊兵衛・伊奈信男らと親交を深める。この年、名取洋之助が主宰する「日本工房」の結成に同人として参加する。1934年日本工房が分裂し、離脱した伊奈信男・木村伊兵衛らと「中央工房」を結成、広告写真・グラフ写真・記録写真・広告図案・包装図案・書籍装丁・家具室内装飾・陳列宣伝用装置・工芸品などの制作を請け負う。またこの年海外向け写真配信機関「国際報道写真協会」(1935年に海外配信の拡大を目的に改組)の創設に参加する。以後、印刷美術の、また1930年代後半から終戦にいたるまでは対外宣伝のリーダーとして創作、写真・印刷雑誌への寄稿、学校講師などの分野で活躍する。1937年5月パリ万国博覧会開幕、日本館に原デザインの写真壁画が展示される。1939年4月ニューヨーク万国博覧会開幕、日本館の日米修交部に原デザインの写真壁画《日米修交》が展示される。1941年東方社に入社し、対外宣伝雑誌『フロント』のデザインを担当する。また、社の活動として奥山儀八郎に謀略宣伝用版画・リノカットの制作を依頼する(1943年1月まで月平均1点のペース)。1945年6月東方社を退職。戦後は「日本宣伝美術会」(1951創設)や日本デザインセンター(1960創設)の創立に参加し、中央委員や代表取締役社長などを歴任してデザイン界の重鎮として活躍した。武蔵野美術大学教授として後進の指導にもあたった。また1952年に開館した国立近代美術館のポスターの多くを制作した。1986(昭和61)年3月26日東京で逝去。【文献】川畑直道『原弘と「僕たちの新活版術」』(DNPグラフィックデザイン・アーカイブ 2002)(滝沢)

原 子康三郎 (はらこ・やすさぶろう) 1912～1981

1912(明治45)年青森県に生まれる。洋画家橋本(原)はなの弟。白天、白天光を雅号として版画誌『彫刻刀』の発表時に使用。1931年青森中学校卒業。同級生に

田中興三・松下千春がおり、1932年には1年下の根市良三・柿崎卓治が中学を卒業する。当時、青森では版画誌『彫刻刀』（1931～1932 17冊）が発行され、原子もその第1号（1931.6）に《森と乙女》と表紙カット、第2号（1931）に《公園風景》《陸奥青森十景》、第3号（1931）に《旅》、第4号（1931）に《扉絵》《子供》、第5号（1931）に《硝石工場》《木枯》、第6号（1932）に《年賀状》《晩秋》《八甲田風景》《堤川に沿ふ》、第7号（1932）に《河畔》を発表。田中をのぞいた原子・根市・柿崎・松下の4人は『彫刻刀』にそれぞれ作品を発表していた。根市・柿崎が卒業をすると4人とも退会し、田中を加えた5人で「余人社」をおこし、デザインを重視した版画誌『純』を創刊（1932.9）。原子は《点景》《地球岬の灯台》の2点を発表するが、『純』は1号で廃刊。柿崎を除く4人は1933年前後にそれぞれ上京。東京では連れ立って、郷里の先輩棟方志功や版画誌『白と黒』『版芸術』の主宰者である料治熊太を訪ねていることが根市の日記「良記暦」に書かれている。東京では「東京市世田谷区浜松町3-4-6井上方」に住む。1981（昭和56）年に逝去。なお、『東奥年鑑』1932年版の作家紹介では光風会展に出品の旨が記されているが、『第85回記念光風会展目録集』（1999）では確認できず。【文献】板倉容子「版画誌の傍らに 青森県創作版画家たちの青春」『緑の樹の下の夢 青森県創作版画家たちの青春展』図録（青森県立郷土館 2001）／『創作版画誌の系譜』（加治）

原田巖岐（はらだ・いつき） 1907～没年不詳

1907（明治40）年に生まれる。山口県師範学校第二部を卒業し、山口県熊毛郡の小学校の教師となる。俳優原田大二郎（1944生）は弟の次男で、1948年頃に養子縁組をする。1948年には山口県熊毛郡小学校長となり、その後、熊毛郡城南小学校などに転勤。1961年、定年退職後は妻の実家がある山口県光市へ転居する。1931年8月3日から7日、大分県師範学校の図画教師武藤完一は講師に平塚運一を招いて、版画教育講習会（大分師範学校第3回夏期図画実技講習会 参加者29名）を開催した。これを機に武藤は版画誌『彫りと摺り』（1931～1933 8冊）を創刊。原田は熊毛郡室津村からこの講習会に参加し、同誌第1号（1931.9）に《エキスリブリス》、第2号（1931.11）に《夕焼》、第3号（1932.1）賀状号に《暁鷄声〔賀状〕》、第4号（1932.6）に《風景》を発表。大分市以外からこの講習会に参加した同宿の者10人は親睦と版画技術向上のために、中津市の武田由平や島美智緒らが中心となり、版画同人誌『空巢』（1931～1932 全4号）を発行。『空巢』という奇妙なタイトルは、講習会のために泊まった部屋が学生のための下宿であり、夏休みで空き巣だったことからの命名である。原田の住まいは山口県であったが、この版画誌に参加し、同誌第1号（1931）に《風景》、第2号（1931.12）に《社》、第3号（1932.9）に《静物》を「原田いつき」の名で発表する。その後、東京の新版画集団発行の『新版画』第1号（1932.6）に《風景》を発表したが、この作品は『彫りと摺り』第4号（1932.6）で発表した《風景》と同じ図柄である。【文献】「創作版画講習会其他版画展等」『郷土図画』1-5（大分県美育研究会

1931.10）／池田隆代「大分県における創作版画誌」『大分県立芸術会館研究紀要』1（2002.9）／武藤隼人「版画家・武藤完一資料集（戦前篇Ⅰ） 作家年譜を中心にして」（武藤隼人 2010）／『創作版画誌の系譜』／原田大二郎ホームページ「きのう」（ネット検索 2017）（加治）

原田一敏（はらだ・かずとし）

大分県師範学校・大分県美育研究会が発行した『郷土図画』第1巻5号（1931.10）版画特集号には平塚運一の《雀》を扉に、原田の《風景》のほか11人の木版画が掲載されている。その中には編集を担当した大分県師範学校の図画教師・武藤完一が記したと思われる記事「版画講習会其他版画展等」が掲載されている。その版画講習会は武藤が1931年8月3日から7日、講師に平塚運一を招いて、大分県師範学校第3回夏期図画実技講習会（参加者29名）として開催したものである。これを機に武藤は版画誌『彫りと摺り』（1931～1933 8冊）を創刊。原田は大分県大野郡三重町からこの講習会に参加し、その第1号（1931.9）に《建物》、第2号（1931.11）に《風景》、第3号（1932.1）賀状号に《水の上の猿〔賀状〕》、第4号（1932.6）に《庭》、第5号（1932）に《風景》、第7号（1933.3）に《エキスリブリス》を発表。大分市以外からこの講習会に参加した同宿の者10人は親睦と版画技術向上のために、中津市の武田由平や島美智緒らが中心となり、版画同人誌『空巢』（1931～1932 4冊）を発行。『空巢』という奇妙なタイトルは、講習会のために泊まった部屋が学生のための下宿であり、夏休みで空き巣だったことからの命名である。原田もこれに参加。その第1号（1931）に《三重町風景》、第2号（1931.12）に《風景》、第3号（1932.9）に《風景》を発表。第4号（1932）にも予定していたが、病気のため作品は送れないとの連絡があったことが記されている。その後、1933年8月には平塚運一講師の2回目となる版画講習会（大分師範学校第5回夏期図画実技講習会）が開催され、これを機に、武藤は創作版画を九州全土に広めたいと『彫りと摺り』を『九州版画』（1933～1941 24冊）と改題した。原田は同誌第8号（1935.10）講習会記念号に《風景》を発表。この号は1935年8月1日から5日に開催された講習会（大分師範学校第7回夏期図画実技講習会 講師：平塚運一、畦地梅太郎）の記念号でもあり、原田の作品も掲載されていることからこの講習会にも参加したものと考えられる。1932年当時は大分県大野郡緒方村に勤務。【文献】「創作版画講習会其他版画展等」『郷土図画』1-5（大分県美育研究会 1931.10）／池田隆代「大分県における創作版画誌」『大分県立芸術会館研究紀要』1（2002.9）／武藤隼人「版画家・武藤完一資料集（戦前篇Ⅰ） 作家年譜を中心にして」（武藤隼人 2010）／『創作版画誌の系譜』（加治）

原田久之助（はらだ・きゅうのすけ） 1895～1967

1895（明治28）年〔京都〕に生まれる。旧姓は四方（しかた）。太田喜二郎に洋画を学ぶ。1923年頃に京都市及び附近の各種学校の図画教育教員で組織された「紫明会」に参加し、1924年1月に開かれた同会の第2回作品展に出品。1928年頃は京都市立安井尋常小学校の訓導。1929年2月の京都創作版画会第1回展に木版画《朝》《習作》を出品。この頃、原田姓となり、1930年の第11回帝展に油彩画《ねむの花》が入選。その後も、1934年の大札記念京都美術館美術展に《早春風景》、1935年の第1回京都市美術展に《八坂風景》《桃の村》、1937年の第2回展に《同志社風景》の油彩画を出品した。1967（昭和42）年逝去。【文献】岡田毅「京都における創作版画運動の展開」『京都府総合資料館紀要』12（1984.3）／『大正期美術展覧会出品目録』（東京文化財研究所 2002）／『昭和期美術展覧会出品目録 戦前篇』（東京文化研究所 2006）（三木）

原田健太郎（はらだ・けんたろう）

飛騨高山の守洞春が中心となって発行した版画誌『版丞』創刊号（1938）に木版画《炉辺》を發表。原田はこの『版丞』について「郷土の版画雑誌として、どこまでも郷土味の溢れた雑誌として進みたい」と作者言に記している。【文献】『創作版画誌の系譜』（加治）

原田繁男（はらだ・しげお）

長野県須坂の信濃創作版画研究会が発行した版画誌『櫟』の第2輯（1934）に《賀状》、第3輯（1934.7）に《夏雲》、第5輯（1935.4）に《賀状》、第7輯（1935.8）に《朝》、第8輯（1935.12）に《蔵書票》、第9輯（1936.4）に《賀状》、第10輯（1936.7）に《早〔阜〕月のほり》、第11輯（1936.11）に《暑中見舞状》、第12輯（1937）に《賀状》、第13輯（1937.6）に《沈丁花》を發表する。当時、原田は上高井郡日滝小学校に勤務していた。その頃、医師で版画家の小林朝治が須坂小学校の眼科医となったことから、教師たちとの交流が生まれ、版画制作が広まり、1933年の夏には平塚運一を講師に招いて「版画及び図画講習会」（会場：須坂小学校）を開催した。このことが契機になって、小林とその参加者たちが「信濃創作版画研究会」を立ち上げ、版画同人誌『櫟』（1933～1937 13冊）を発行する。第13輯で休刊するが、戦後復刊。【文献】『須坂版画美術館 収蔵品目録2 版画同人誌「櫟」「臥竜山風景版画集』』（須坂版画美術館 1999）／『創作版画誌の系譜』（加治）

原田什三（はらだ・じゅうぞう）

東京府に生まれる。長野県師範学校二部1年に在学中、同校生徒による版画誌『樹水』（1938～1940? 4冊）の第1号（1938）に《無題》を發表。1940年同校を卒業し、1950年当時は長野県上高井郡須坂西高等小学校に勤務。【文献】『樹水』1／『卒業生名簿 昭和25年』（信州大学教育学部本校 1950）（加治）

原田 英（はらだ・ひで）

1936（昭和11）年の第5回日本版画協会展に木版画《風景》を出品。【文献】『昭和期美術展覧会出品目録 戦前篇』（東京文化財研究所 2006）（三木）

原田正己（はらだ・まさみ）

1936年8月1日から6日まで、大分県師範学校において開催された第6回夏期図画講習会には、武藤完一らの尽力で西田武雄を講師に招いてエッチング講習会が5日間にわたって行われ（参加者32名）、県外参加者の一人として原田も参加する。当時は宮崎県田野小学校の教員と思われるが、作品は未見。【文献】『エッチング』22（樋口）

原田 充（はらだ・みつる）

大分県師範学校の図画教師武藤完一は1931年の夏休みに平塚運一を講師に招き、版画教育講習会（大分師範学校第3回夏期図画実技講習会 8.3～7）を開催した。武藤はこれを機に版画誌『彫りと摺り』（1931～1933）を創刊。原田も講習会に参加し、同誌第1号（1931.9）に《風景》、第2号（1931.11）に《鳥》、第3号（1932.1）賀状号に《暁鷄声〔賀状〕》を發表する。当時、原田は速見郡杵築小学校の教師として勤務していた。【文献】「創作版画講習会其他版画展等」『郷土図画』1-5（1931.10）／池田隆代「大分県における創作版画誌」『大分県立芸術会館研究紀要』1（2002.9）／武藤隼人『版画家・武藤完一資

料集（戦前篇Ⅰ）作家年譜を中心にして』（武藤隼人 2010）／『創作版画誌の系譜』（加治）

原田義一（はらだ・よしかず）

1936年設立の豊橋エッチング協会（細島昇一方）の会員。『エッチング』第48号（1936.10）に掲載の河邊春次「豊橋エッチング協会例会記」によると、同年9月23日開催の例会では、原田は「人物立像」を制作したとあるが、作品は未見。当時、豊橋市内に勤務の教員と思われる。【文献】『エッチング』48（樋口）

原山庄作（はらやま・しょうさく）

長野県下水内郡の小学校教師の集まりであった下水内郡手工研究会は、版画同人誌『葵』（1934～1938 5冊）を発行する。その第1号（1934.9）に《雪景色》を發表。【文献】『須坂版画美術館 収蔵品目録2 版画同人誌「櫟」「臥竜山風景版画集』』（須坂版画美術館 1999）／『創作版画誌の系譜』（加治）

春村ただを（はるむら・ただお） 1901～1977

1901（明治34）年7月7日千葉県長生郡南白亀村（現白子町）に生まれる。本名田邊唯雄。幼い頃より絵を好む。1920年県立千葉中学校卒業。神戸に移り、同年関西学院高等学部商科に進む。ここで1年先輩の北村今三と出会い、神戸のモダンな風景をおもな題材に木版画を始める。北村は兄が山田耕筈と親しく、早くからドイツ表現主義にふれてその影響下に版画を手がけていた。1922年2月、北村を中心に三宮で創作版画展覧会を開催（弦月画会（関西学院絵画部）主催・日本創作版画協会後援）、「田邊春村」の名で4点を出品。同年の日本創作版画協会第4回展に「春村ただを」の名で《風景－冬》が初入選（以後第5～9回展に連続入選）。1924年から関西学院の同人誌『結晶』『友達』に木版による表紙や扉絵で参加、この頃北村とともに「きつつき版画工房」を主催。1924年になした仕事は多く、他にも京都で開かれた詩と版画社第1回版画展覧会への出品や、神戸版画の家が刊行した版画集『HANGA』第2輯への参加がある（以後第5輯、第8輯、第9・10合輯に発表）。版画の家からは、1927年に個人版画集《神戸風景》も版行している。1925年「春村ただをを版画個人展覧会」を神戸市県会議事堂にて開催。同年関西学院文学部の同人誌『ピオニエ』創刊に参加。同学関係では『関西文学』にも木版表紙を寄せている。1926年第7回ロサンゼルス国際版画展に出品。1928年春陽会第6回展に《鹽谷風景》で入選。1929年5月に川西英・北村今三・福井市郎・菅藤霞仙と創作版画グループ「三紅会」を結成（のち前田藤四郎・神原浩も参加）、同年6月第1回展を開き、1936年の第6回展まで連続出品。その間の1930年に『神戸又新日報』の新聞小説に木版挿絵を寄せ、1931年には個人版画集『春』を刊行、同年第1回兵庫県美術家連盟展に木版画2点を出品している。版画誌については『きつつき』（中島重太郎編）第3号（1931.6）への同人としての参加や『版芸術』第9号（1932.12）への参加を確認できる。日本版画協会へは1931年の第1回展のみ出品があり、また1936年の第11回国際オリンピック芸術競技（ベルリン）に《スケーティング》《アイスホッケー》が入選、1940年の国画家第15回展でも入選を果たしている。1930年代には三紅会のメンバーで大阪の俳句雑誌『ムササビ』の表紙を木版画で手がけてもいる。1938年頃右手に大怪我を負い、以来制作から遠ざかる。1945年6月5日の神戸大空襲で作品や版木、道具を焼失。戦後は生

地の千葉県長生郡南白亀村へ戻り、役場に勤務。1960年代に再び木版画を試みるも作家としての再起は果たせず、1977（昭和52）年10月15日千葉市で逝去。春村ただえについては長く生没年や経歴が不詳だったが、近年の金井紀子氏の調査により詳細が明らかになった。氏の「版画家・春村ただえをとその作品について」に全貌が記されている。【文献】『川西英と神戸の版画—三紅会に集った人々—』（神戸市立小磯記念美術館 1999）／『大正期美術展覧会出品目録』（東京文化財研究所 2002）／『昭和期美術展覧会出品目録 戦前編』（東京文化財研究所 2006）／『創作版画誌の系譜』／金井紀子「版画家・春村ただえをとその作品について」『神戸市立博物館研究紀要』26（2010.3）／『春村ただえ展：生誕110年』（神戸市立博物館 2011）／『特別展 関西学院の美術家 知られざる神戸モダニズム』（神戸市立小磯記念美術館 2013）（西山）

伴 登代彦（ばん・とよひこ）

1929（昭和4）年の第1回京都創作版画会展（2.1～5 京都・大丸）に木版画《港》を出品。【文献】『創作版画・古版画展覧会目録〔京都創作版画会第一回展覧会〕』（京都創作版画会 1929）／岡田毅「京都における創作版画運動の展開」『京都府立総合資料館紀要』12（1984.3）（三木）

伴 吉衛（ばん・よしえ）

1936年設立の豊橋エッチング協会（細島昇一方）の会員。同年8月28・29日の両日、豊橋中学校において西田武雄を講師に招いて開催されたエッチング講習会に参加する。当時、豊橋市内に勤務の教員と思われるが、作品は未見。【文献】『エッチング』47・48（樋口）

坂東敏夫（ばんどう・としお）

1922（大正11）年11月に神戸で開かれた第1回ひまわり美術展（2～6 三宮・三〇九番館 主催：神戸市下山手通7丁目 ひまわり美術店）にエッチング《夏》を出品。洋画家「坂東敏雄」との関連は不明。【文献】『第一回ひまわり美術展覧会出品目録』（1922）（三木）

坂東敏雄（ばんどう・としお） 1895～1973

1895（明治28）年7月16日徳島市に生れる。大阪商船に勤務する父親の転勤で各地に移り住む。宮崎県の旧制中学を卒業後、大阪で織田東禹（版画家・織田一磨の兄）に絵画を学ぶ。その後上京し、1914（大正3）年川端画学校で藤島武二に師事。同期に上山二郎・佐伯祐三らがいた。第12回文展、第1・2回帝展（1918～1920）に連続して入選する。1922年3月、上山と同船で神戸から渡仏。パリでは当初藤田嗣治と同じ住所のアパートに上山とともに住み、藤田に私淑・影響を受けるが、その後坂東が運転するオートバイに同乗していた藤田が事故で負傷したのがきっかけで疎遠になったという。1922・1926年のサロン・ドートンヌや1923・1924年のサロン・デ・テュイルリーなどに出品。また日本美術大展覧会（1928）をはじめ第2～4回巴里日本美術協会展（1929～1931）、巴里邦人展（1933）、1938・39年の巴里日本美術家展などパリ在住の日本人画家の展覧会に出品している。この間、藤田がデビューしたシェロン画廊と1924年からシェロンが亡くなる1931年まで契約。パリにアトリエと住居を構え、1939年にはフランス人女性マリー・ユーゼニ・ネルシーと結婚。そのままフランスに永住し、一度も帰国す

ることなく、1973（昭和48）年3月1日パリで逝去した。版画の制作については、戦前の制作かどうかは不明だが、目黒区美術館で開催された『パリの日本人画家 1920年代を中心に—レオナルド・フジタをめぐる—』展出品リストに年代不詳の銅版画《猫》《犬》（いずれも絹手彩色）2点が掲載されている。作品は未見。【文献】『『パリの日本人画家 1920年代を中心に—レオナルド・フジタをめぐる—』展』図録（目黒区美術館 1994）／『知られざる画家 上山二郎とその周辺』展図録（芦屋市立美術館 1994）／『薩摩治郎八と巴里の日本人画家たち』展図録（徳島県立近代美術館ほか 1998.10～1999.4）（樋口）

坂内宏観（ばんない・こうかん） 1900～1962

1900（明治33）年福島県大沼郡会津高田町に生まれる。1920年福島県立会津中学校を卒業。上京して同郷出身の日本画家坂内青嵐に師する。風景画を得意とし、新しい日本風景画の開拓を目指す。1937年「現代東海道五十三次」（銀座・伊東屋）、1940年「坂内宏観風景展」（銀座・松坂屋）を開催。これらがきっかけで、渡辺庄三郎にすすめられて1942年渡辺版画店から木版画『現代東海道五十三次』シリーズを刊行、これまで《雪の日本橋》《熱田 明けゆく古城》《箱根 芦ノ湖》の3点を確認。1943年日本版画奉公会会員。戦中福島に疎開し、戦後も同地で画作を続けた。1963（昭和38）年逝去。【文献】村山鎮雄『福島近代美術』（三好企画 1992）／『エッチング』123（樋口）